

有価証券報告書

事業年度 自 平成29年4月1日
(第10期) 至 平成30年3月31日

株式会社フォレストホールディングス

有価証券報告書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書を末尾に綴じ込んでおります。

目 次

頁

第10期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	6
4 【関係会社の状況】	8
5 【従業員の状況】	9
第2 【事業の状況】	10
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	10
2 【事業等のリスク】	11
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	13
4 【経営上の重要な契約等】	18
5 【研究開発活動】	18
第3 【設備の状況】	19
1 【設備投資等の概要】	19
2 【主要な設備の状況】	19
3 【設備の新設、除却等の計画】	21
第4 【提出会社の状況】	22
1 【株式等の状況】	22
2 【自己株式の取得等の状況】	25
3 【配当政策】	26
4 【株価の推移】	26
5 【役員の状況】	27
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	29
第5 【経理の状況】	32
1 【連結財務諸表等】	33
2 【財務諸表等】	63
第6 【提出会社の株式事務の概要】	73
第7 【提出会社の参考情報】	74
1 【提出会社の親会社等の情報】	74
2 【その他の参考情報】	74
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	75

監査報告書

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	九州財務局長
【提出日】	平成30年6月25日
【事業年度】	第10期（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）
【会社名】	株式会社フォレストホールディングス
【英訳名】	Forest Holdings, Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 吉村 恭彰
【本店の所在の場所】	大分県大分市西大道二丁目3番8号 （同所は登記上の本店所在地であり、実際の業務は下記で行っております。）
【電話番号】	該当事項はありません。
【事務連絡者氏名】	該当事項はありません。
【最寄りの連絡場所】	福岡県福岡市博多区東比恵三丁目1番2号
【電話番号】	092(477)5496
【事務連絡者氏名】	経理部長 古川 和男
【縦覧に供する場所】	該当事項はありません。

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第6期	第7期	第8期	第9期	第10期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
売上高（百万円）	428,268	417,017	462,920	450,055	456,826
経常利益（百万円）	5,708	4,417	7,314	5,516	6,155
親会社株主に帰属する当期純利益（百万円）	3,041	2,117	4,038	3,241	3,961
包括利益（百万円）	2,469	9,996	2,193	6,197	8,091
純資産額（百万円）	94,713	105,023	104,086	109,845	117,433
総資産額（百万円）	229,952	239,588	241,760	242,817	254,895
1株当たり純資産額（円）	2,504.64	2,786.34	2,920.96	3,084.49	3,297.76
1株当たり当期純利益（円）	85.31	60.22	116.10	94.06	114.97
潜在株式調整後1株当たり当期純利益（円）	—	—	—	—	—
自己資本比率（％）	38.3	40.9	41.6	43.8	44.6
自己資本利益率（％）	3.47	2.28	4.07	3.13	3.60
株価収益率（倍）	—	—	—	—	—
営業活動によるキャッシュ・フロー（百万円）	1,392	5,944	△2,429	9,866	7,906
投資活動によるキャッシュ・フロー（百万円）	△1,982	△3,840	△2,579	△2,280	△5
財務活動によるキャッシュ・フロー（百万円）	△2,300	△1,296	△3,710	△974	△740
現金及び現金同等物の期末残高（百万円）	31,890	32,729	24,009	30,786	37,946
従業員数（人）	2,304	2,258	2,244	2,244	2,216
（外、平均臨時雇用者数）	(1,263)	(1,414)	(1,414)	(1,502)	(1,569)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないため記載しておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第6期	第7期	第8期	第9期	第10期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
売上高(百万円)	1,896	1,645	1,461	1,360	1,460
経常利益(百万円)	689	664	652	625	649
当期純利益(百万円)	651	522	633	584	563
資本金(百万円)	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000
発行済株式総数(株)	37,206,379	37,206,379	37,206,379	37,206,379	37,206,379
純資産額(百万円)	57,294	57,433	56,926	56,979	57,032
総資産額(百万円)	67,646	67,982	66,357	67,680	68,469
1株当たり純資産額(円)	1,629.63	1,633.94	1,651.90	1,653.83	1,655.51
1株当たり配当額(円)	14.00	13.00	16.00	14.00	17.00
(うち1株当たり中間配当額)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益(円)	18.27	14.86	18.21	16.94	16.35
潜在株式調整後1株当たり当期純利益(円)	-	-	-	-	-
自己資本比率(%)	84.7	84.5	85.8	84.2	83.3
自己資本利益率(%)	1.13	0.91	1.11	1.03	0.99
株価収益率(倍)	-	-	-	-	-
配当性向(%)	76.62	87.46	87.82	82.60	103.92
従業員数(人)	88	67	38	34	45
(外、平均臨時雇用者数)	(8)	(9)	(3)	(3)	(5)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないため記載しておりません。

3. 第6期の1株当たり配当額には、創業135年と業績を勘案した特別配当2円を含んでおります。

4. 第8期の1株当たり配当額には、特別配当3円を含んでおります。

5. 第9期の1株当たり配当額には、特別配当1円を含んでおります。

6. 第10期の1株当たり配当額には、設立10年と業績を勘案した特別配当4円を含んでおります。

2 【沿革】

明治12年7月 大石薬舗開業
大正8年7月 吉村薬局開業
大正8年7月 梁井一心堂開業
大正12年2月 吉松一心堂開業
昭和5年1月 合名会社吉村益次商店に改組
昭和13年12月 梁井一心堂、合資会社梁井一心堂に改組
昭和15年11月 合名会社小倉薬局開業
昭和22年3月 合名会社小倉薬局、(株)小倉薬局に改組
昭和23年5月 (株)吉村益次商店に改組
昭和23年7月 合資会社梁井一心堂、(株)梁井一心堂に改組
昭和24年9月 吉松一心堂、(株)吉松一心堂に改組
昭和28年2月 (株)小倉薬局、小倉薬品(株)に商号変更
昭和31年5月 大分医療器(株)設立
昭和31年12月 吉村薬品(株)に商号変更
昭和33年8月 宮崎吉村薬品(株)設立
昭和39年4月 (株)吉松一心堂、ヨシマツ薬品(株)に商号変更
昭和42年7月 (株)ダイヤ設立
昭和46年11月 小倉薬品(株)、コーエー小倉薬品(株)に商号変更
昭和47年4月 ヨシムラ産業(株)設立
昭和47年7月 大分医療器(株)、ヨシムラ医療器(株)に商号変更
昭和48年4月 (株)梁井一心堂、ヤナイ薬品(株)に商号変更
昭和49年3月 (株)九州エムイーエス設立
昭和49年8月 ヨシムラ産業(株)、(株)サン・ダイコーに商号変更
昭和52年5月 コーヤクアビリティーズ(株)開業
昭和53年1月 コーエー小倉薬品(株)、コーヤク(株)に商号変更
昭和53年9月 (株)西日本特殊臨床検査センター設立
昭和54年3月 (株)九州エムイーエス、(株)パイオメディカル九州および(株)長崎医療器と合併し、(株)ユニファに商号変更
昭和55年4月 ヨシムラ医療器(株)、(株)サン・メックに商号変更
昭和56年7月 コーヤクアビリティーズ(株)、コーヤク・メディカル・アビリティーズ(株)に商号変更
昭和57年10月 キョーエイサービス(株)設立
昭和61年1月 コーヤク・メディカル・アビリティーズ(株)、コマック(株)に商号変更
平成元年4月 吉村薬品(株)、宮崎吉村薬品(株)、ヤナイ薬品(株)およびヨシマツ薬品(株)の薬専事業部に関する営業を(株)ダイヤに譲渡し、(株)創健に商号変更
平成2年5月 キョーエイサービス(株)、キョーエイ・システム(株)に商号変更
平成4年4月 吉村薬品(株)と宮崎吉村薬品(株)、ヤナイ薬品(株)およびヨシマツ薬品(株)が合併し、(株)ダイコーに商号変更
平成4年5月 (株)ダイコーおよびコマック(株)の臨床検査受託に関する営業を(株)西日本特殊臨床検査センターに譲渡し、(株)リンテックに商号変更
平成5年10月 (株)ダイコー、山口薬品(株)と合併
平成6年5月 コーヤク(株)、キョーエイ薬品(株)に商号変更
平成10年4月 (株)ダイコーとキョーエイ薬品(株)、コマック(株)および(株)サン・メックが合併し、(株)アステムに商号変更
平成10年4月 キョーエイ薬品(株)ヘルスケア事業部および藤村薬品(株)薬専事業部に関する営業を(株)創健に譲渡し、(株)アステムヘルスケアに商号変更
平成17年4月 キョーエイ・システム(株)と(株)ダイコーサービスが合併し、(株)アステムサービスに商号変更
平成17年12月 藤村薬品(株)の株式取得
平成19年6月 藤村薬品(株)の株式を追加取得し、連結子会社化
平成20年1月 (株)アステムヘルスケア、(株)よんやく薬粧事業を譲り受け、(株)リードヘルスケアに商号変更
平成20年10月 (株)アステムが株式移転により完全親会社である当社(株)フォレストホールディングス)設立
平成21年4月 会社分割により(株)アステムから子会社の管理業務および不動産賃貸業務の一部を承継
平成21年10月 株式交換により(株)サン・ダイコーおよび(株)リンテックならびに(株)ユニファを完全子会社化
平成23年4月 (株)リンテックとの株式交換により(株)九州オープンラボラトリーズ(現 持分法適用会社)の株式取得
平成25年4月 (株)アステム、(株)ユニファと合併
平成25年6月 (株)キョーハイ、(株)フォレックスに商号変更
平成25年6月 現物分配により(株)アステムの完全子会社である(株)アステムサービス、(株)フォレックス、(株)メディクリーン、(株)イー・エフ・エイチ、(株)ケンミンの株式取得
平成26年6月 現物分配により(株)F I Tの所有する(株)ダイコー沖縄の株式取得
平成26年6月 (株)アステムサービス、(株)フォレストサービスに商号変更

平成27年7月 追加取得により(株)ダイコー沖縄を完全子会社化
平成27年10月 (株)サン・ダイコー、(株)シンガサナ・ウナギ・インドネシア（インドネシア）を設立
平成27年11月 (株)フォレックスを清算
平成28年4月 (株)フォレストサービス、ソニックと合併
平成28年9月 (株)ダイコー沖縄、沖縄三和メディカルを完全子会社化
平成28年10月 (株)アステム、(株)西日本ジェネリックを子会社化
平成28年11月 (株)フォレストホールディングス、東京ベイツック(株)を子会社化

3 【事業の内容】

当社グループ（当社及び当社の関係会社）は、当社（㈱フォレストホールディングス）、子会社27社及び関連会社11社（うち持分法適用関連会社1社）により構成されており、医薬品・医療機器等の卸販売を主たる業務、その他事業を付帯業務としております。

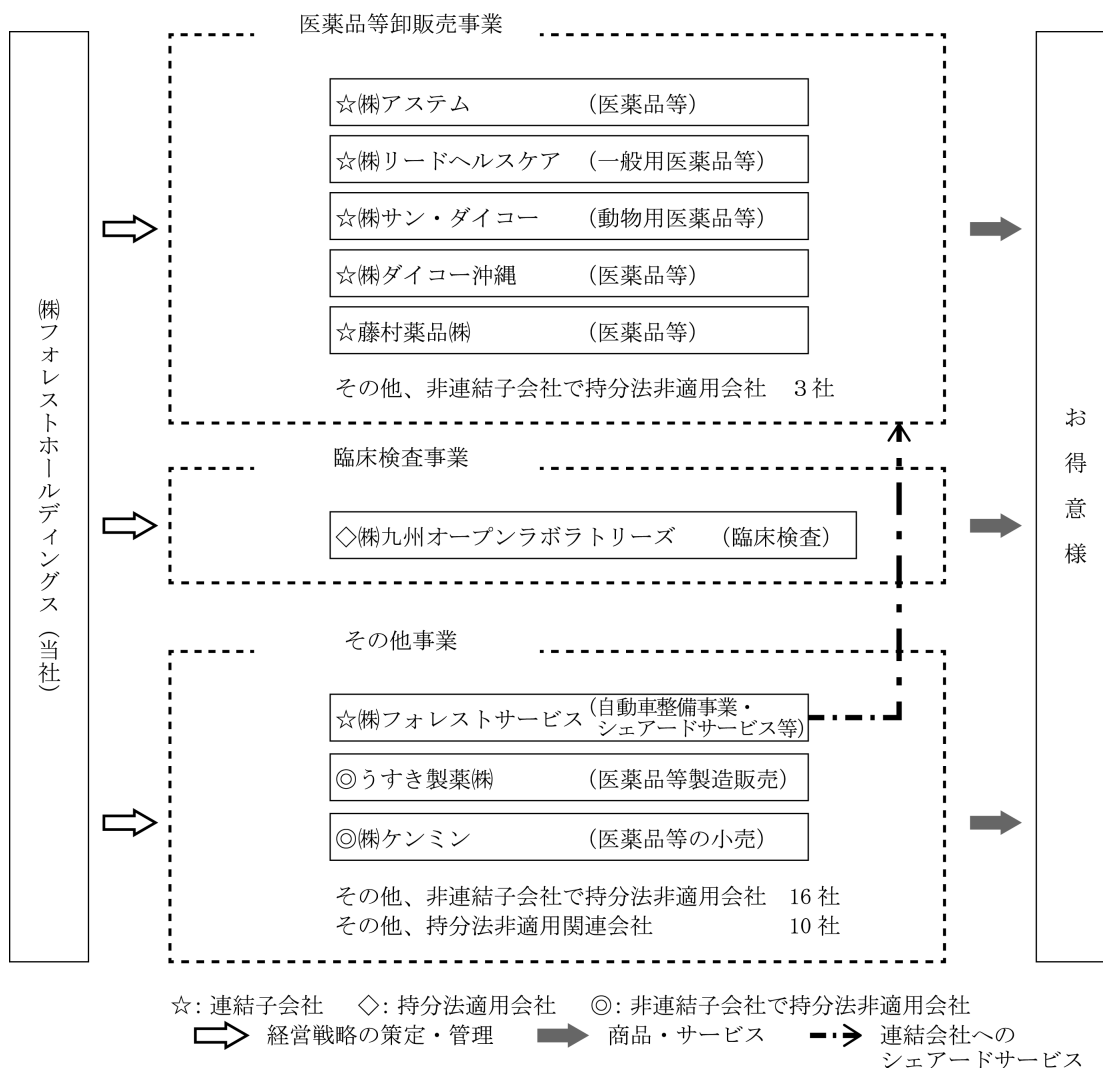
当社グループの事業内容及び当社と関係会社の当該事業に係る位置付けは次のとおりであります。

なお、セグメント情報を記載していないため、事業部門別に記載しております。

- (1) 医薬品等卸販売事業……主要な商品は医療用医薬品、一般用医薬品、動物用医薬品、医療機器等であります。
医療用医薬品……子会社㈱アステム他子会社3社が卸販売しております。
一般用医薬品……子会社㈱リードヘルスケアが卸販売しております。
動物用医薬品……子会社㈱サン・ダイコーが卸販売しております。
医療機器等 ……子会社㈱アステム他子会社2社が卸販売しております。
- (2) 臨床検査事業……持分法適用関連会社㈱九州オープンラボラトリーズにて行っております。
- (3) その他事業 ……子会社㈱フォレストサービスのほか、子会社18社、関連会社10社で行っております。

[事業系統図]

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



(注) 1. 連結子会社

(株)アステム、(株)リードヘルスケア、(株)サン・ダイコー、(株)ダイコー沖縄、藤村薬品(株)、(株)フォレストサービス

2. 非連結子会社で持分法非適用会社

(株)ケンミン、(株)メディクリーン、(株)グリーンウェーブ、(株)スターネット、協和化学(株)、うすき製薬(株)、(株)セーフマスター、(株)ohana本舗、(株)ニチメン工業、(株)沖縄三和メディカル、(株)つえエーピー、(株)エフズクリエイト、(株)シンガサナ・ウナギ・インドネシア、(株)けやき、(株)創健、(株)西日本ジェネリック、東京ベイテック(株)、ジェイシード(株)、(株)ネクスト、(株)エフズ農園、重宝水産(株)

3. 関連会社で持分法適用会社

(株)九州オープンラボラトリーズ

4. 関連会社で持分法非適用会社

(株)NPC、(株)松尾薬局、(株)メディック、吉村不動産(株)、(株)コア・クリエイトシステム、ケアネットイノベーション投資事業組合、(株)グリーン環境マテリアル、(株)グッドサイクルシステム、(株)大信薬局、(株)オキチク商事

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有割合又は被所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) ㈱アステム (注) 1、3	大分県 大分市	3,355	医療用医薬品、 医療機器等の卸販売	100.0	業務受託 役員の兼任 5人
㈱リードヘルスケア (注) 1、2、4	北九州市 小倉南区	1,900	一般用医薬品等の 卸販売	53.7 (53.7)	業務受託 役員の兼任 3人
㈱サン・ダイコー	大分県 大分市	90	動物用医薬品、 食品関連等の卸販売	100.0	業務受託 役員の兼任 3人
㈱ダイコー沖縄 (注) 2	沖縄県 宜野湾市	95	医薬品等の卸販売	100.0 (100.0)	業務受託 役員の兼任 2人
藤村薬品㈱ (注) 1、2	長崎県 長崎市	480	医薬品等の卸販売	50.3 (50.3)	業務受託 役員の兼任 1人
㈱フォレストサービス	大分県 大分市	99	自動車整備 シェアードサービス等	100.0	業務受託 役員の兼任 2人
(持分法適用関連会社) ㈱九州オープンラボラトリーズ	福岡市 博多区	50	臨床検査	34.0	業務委託 役員の兼任 3人

(注) 1. 特定子会社に該当しております。

2. 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。

3. ㈱アステムについては、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 売上高	368,815百万円
	(2) 経常利益	4,022百万円
	(3) 当期純利益	2,913百万円
	(4) 純資産額	90,733百万円
	(5) 総資産額	211,681百万円

4. ㈱リードヘルスケアについては、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 売上高	54,741百万円
	(2) 経常利益	82百万円
	(3) 当期純利益	81百万円
	(4) 純資産額	1,178百万円
	(5) 総資産額	18,348百万円

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

セグメント情報を記載していないため、事業部門別の従業員数を示すと次のとおりであります。

平成30年3月31日現在

事業部門の名称	従業員数（人）
医薬品等卸販売事業	2,139（1,556）
その他事業	77（13）
合計	2,216（1,569）

(注) 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は（ ）内に年間の平均人員を外数で記載しております。

(2) 提出会社の状況

平成30年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
45 (5)	43.7	20.1	6,239,823

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は（ ）内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

3. 提出会社の状況についても、セグメント情報の記載をしておりません。

4. 前事業年度末に比べ従業員数が11名増加しておりますが、主として平成29年4月1日付で、人事部門及び総務部門を当社の連結子会社である㈱アステムから移管したためであります。

(3) 労働組合の状況

当社グループの㈱ダイコー沖縄にはダイコー沖縄労働組合があり、平成30年3月31日現在における組合員数は74人で、上部団体には加盟しておりません。なお、労使関係は円滑に推移しております。

また、当社グループの他の会社には労働組合はございません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

今期は新しいグループ中期経営計画「GENESYS」を策定いたしました。これまでフォレストグループは常に市場成長を前提に、「上りの戦略」で事業を推し進めてまいりました。しかし、今後は財政難と少子化に伴う人口減少及び高齢社会の本格的な到来により、市場の縮小が予測される中で拡大だけでなく、「下りの戦略」への対応も考慮しながら進まなくてはなりません。

この状況を打破するためには、従来の常識や価値観に囚われず、未来がどのような社会になるか、またすべきかをゼロベースで発想して、新たな着想を事業の中に数多く盛り込む勇氣が必要となります。これが実現できたとき、初めて次代に事業をつなぐ道筋が見えてくると考えております。

“GENESYS”は、“GENESIS”（創世記、起源、起こり）と“SYSTEM”（組織、制度、体制、体系）を組み合わせた造語であり、「“無”から“有”を創り出し、革新的な企業体を構築する」という意を込めて命名いたしました。



医療用医薬品分野におきましては、今後は社会保障費の抑制や消費税増税に加え、頻回改定を含む薬価制度の抜本改革、多剤併用や残薬といったポリファーマシーの問題、流通改善の推進を目的とした行政主導によるガイドラインの制定など、更に厳しさを増すことが予測されますが、地域包括ケアシステムの支援活動の拡大、がんや循環器系の専門領域に特化したMC活動の強化等、更に進化を加速してまいります。

医療機器等分野におきましては、前年度下期より設置した調達交渉部による一物一価への挑戦、衛生材料等の仕入先の統一及びGPO（共同購買組織）への取り組み等により、更なる原価の低減を図ってまいります。また、営業部門におきましては医療機器卸として専門分野でのポジションの優位性を高めるために、営業員に対し専門知識を強化するメディカル版MC制度をスタートさせます。

メーカー様との関係強化では、特に内視鏡分野での九州市場での地位を確立するために、主力メーカー代理店権の獲得を視野に各拠点専従者の配置を実施してまいります。更に、先進的な製品を生み出しているメーカー様との連携を積極的に強化し、メディカル分野の専門性を高めてまいります。

動物用医薬品及び食品等分野におきましては、事業領域のさらなる拡大に挑み、水産養殖販売事業、農産物加工販売事業に取り組んでまいりましたが、今後さらに経営資源を投下し6次産業化への展開を続けてまいります。また、海外との取引におきましては、原料輸入に留まらず、国内の優れた商品の海外への輸出を含め、加速し続けてまいります。

一般用医薬品分野におきましては、自社開発品のブランド構築を図ってまいります。中でも、MREを素材とした事業につきましては、取り組みを強化し、ブランド品に育てるべく注力してまいります。さらに、事業領域の拡大を図りBtoC事業を強化するとともにMRE等の自社ブランド品をeコマースで直接消費者に販売するDtoC事業にも経営資源を傾注してまいります。また、コスト面におきましては物流コスト削減を強化するとともに業務の標準化に着手し、さらなる生産性の向上を図り、収益体制の強化に挑戦してまいります。

経営管理面におきましては、新たに発足した「改革特命担当 チームZero1」を中心に業務と組織の改革に着手し、医薬事業とメディカル事業が融合した革新的な経営基盤を創り上げ、新中期経営計画期間中に一つの形として結論を出したいと考えております。また、グループガバナンスのあり方を再度検討し、未着手であった規程や制度を構築してまいります。人事・労務の分野におきましては、優秀な人材の確保と定着を念頭に、更なる働き方改革を推進してまいります。加えて、管理職のマネジメントスキルを高め、若手社員の自律と成長を促す「新しい教育体制」を確立し、人と組織の活性化を進めてまいります。

今期の連結経営指標としましては、売上高4,550億円、営業利益29億98百万円、経常利益52億89百万円、親会社株主に帰属する当期純利益35億62百万円を目標といたしました。

グループの中核事業であります医療用医薬品事業を中心に厳しい経営環境が予想されますが、経営資源を最大限に活用すると同時にゼロベースでの経営改革と顧客創造に着手し、苦境を打破するための足がかりとなる1年になるよう取り組んでまいります。

2 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のあるリスクには、主として以下のようなものがあります。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものです。

(1) 競争激化のリスク

医療用医薬品については薬価基準として価格が公的に決められており、総医療費抑制の一環としてこの薬価が定期的に見直され、大半は切下げられております。これは、卸は勿論、取引先である病医院・調剤薬局の経営にも打撃となり、価格等での卸への要求も益々厳しくなっております。卸業界においては、全国的に規模のメリットを追求、事業基盤を拡大するため、事業戦略の一環として資本提携や企業買収を含む戦略的提携を模索する動きが活発化しております。総需要が伸び悩む中で、限られた需要をめぐって勝ち残りを賭けた企業間競争は日増しに激化し、売上総利益率の低下に歯止めがかからない状況にあります。当社グループは経営理念に則り、価格に偏重しない卸本来の機能競争に傾注してはおりますが、一方であらゆる競争に耐えることの出来る低コスト体質への備えを怠れば、経営成績に重大な影響を及ぼす可能性があります。

(2) 売上債権管理上のリスク

医療機関及び調剤薬局、薬局・薬店、畜産・水産事業者等の得意先との間で取引契約書を締結し、請求書発行後概ね3ヶ月以内に回収できている先におきましては債権管理上の大きな問題は現在のところ生じておりません。しかし、当社グループは、健全経営推進の視点から債権管理に厳しく取り組み、貸倒懸念債権先に対しては個別に回収可能性を勘案し、債権額に対して一定の割合で引当金を計上し不測の事態に備えております。これら対象先には当社グループの出資先や融資先も含まれており、今後とも債権管理をより一層強化していく方針です。しかしながら、昨今の厳しい業界環境を反映し、新たに長期債権先に転じる得意先等もあり、予測不能な事態が生じた場合は、経営成績に重大な影響を及ぼす可能性があります。

(3) 取扱商品に係るリスク

販売商品に関し、副作用、仕入先の倒産、その他予測不可能な事態の発生等により、商品の販売不能や回収が生じた場合には、経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

また、医療用医薬品の価格については、薬価基準の影響を受けており、薬価基準の改訂の状況に応じて、経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 特有の商慣習に係るリスク

医薬品としての特性上、価格交渉が未妥結のうちに商品を納入し、その後の交渉により価格が最終的に決定するという業界特有の商慣習の下に置かれております。価格交渉の進展状況によっては、経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(5) メーカーとの取引慣行に係るリスク

医薬品メーカーとの間において、仕入商品に係る歩戻金と販売奨励金については、その料率及び金額についてメーカーの政策や業績により左右される部分があるため、このような場合には当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(6) システムに係るリスク

当社グループは営業システム、物流システム、経理システム等の各種コンピュータシステムに業務を依存しているため、これら各種システムにトラブルが発生すると、業務に支障が生じ、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 法的規制に係るリスク

医薬品・医療機器等に係る事業については、薬機法その他関連法規の適用がなされます。その結果、営業拠点の開設、医薬品・医療機器等の販売、管理等に法的規制を受けることになります。

(8) 個人情報漏洩に係るリスク

個人情報の保護に関しては、情報セキュリティー部会を設置し、個人情報保護管理のための責任者を定めました。そして、個人情報保護方針を策定し、社内外に公表するとともに、個人情報保護規程、外部委託管理規程を制定、また、従業員に対しては機密保持に関する誓約書を提出させ、個人情報保護に関する教育と啓発を実施する等、安全管理措置の継続的な整備をしておりますが、万一、個人情報が漏洩した場合には、社会的信用を失墜させ、経営成績に重大な影響を及ぼす可能性があります。

(9) 自然災害に係るリスク

当社グループは、大規模な自然災害により、営業拠点及び物流拠点が深刻な被害を被った場合、当社グループの業績及び財務状況に影響を与える可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社、連結子会社及び持分法適用会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

① 財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度における経営成績と、前連結会計年度との主な増減は、以下のとおりであります。

a. 売上

売上高は4,568億26百万円（前年同期比1.5%増）となりました。

部門別の状況につきましては、医薬品等卸販売事業は4,562億38百万円（同1.5%増）、その他事業では5億87百万円（同7.3%増）となりました。

b. 売上総利益、販売費及び一般管理費、営業利益

売上総利益は372億13百万円（同2.1%増）となり、7億61百万円増加しました。

販売費及び一般管理費は、334億83百万円（同1.0%増）となり、3億44百万円増加しました。

その結果、営業利益は、37億29百万円（同12.6%増）となり、4億17百万円増加しました。

c. 営業外損益、経常利益

営業外収益は24億60百万円（同6.5%増）となり、1億50百万円増加しました。

営業外費用は35百万円（同66.3%減）となり、70百万円減少しました。

その結果、経常利益は61億55百万円（同11.6%増）、6億38百万円増加しました。

d. 特別損益、親会社株主に帰属する当期純利益

特別利益は3億61百万円（同312.8%増）となり、2億73百万円増加しました。

特別損失は4億39百万円（同13.7%増）となり、52百万円増加しました。

以上の結果、税金等調整前当期純利益は60億77百万円（同16.5%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は39億61百万円（同22.2%増）となりました。

当連結会計年度における財政状態と、資産及び負債、純資産の主な増減は、以下のとおりであります。

e. 資産

流動資産は、譲渡性預金の払出等により有価証券は255億円減少したものの、現金及び預金は321億62百万円増加、受取手形及び売掛金は10億91百万円増加しました。

その結果、流動資産は1,732億98百万円となり、80億54百万円増加しました。

有形固定資産は、営業支店の建替えや土地の取得等の新規投資により11億77百万円増加しましたが、土地の売却による減少17億60百万円、減価償却による減少12億68百万円等もあり、合計としては27億19百万円減少しました。投資有価証券は、株価上昇により含み益が51億26百万円増加する等し、合計としては66億87百万円増加しました。

その結果、固定資産は815億96百万円となり、40億23百万円増加しました。

f. 負債

流動負債は、主に、支払手形及び買掛金が15億55百万円増加、電子記録債務が3億56百万円増加、未払法人税等が6億30百万円増加しました。

その結果、流動負債は1,268億57百万円となり、29億円増加しました。

固定負債は、退職給付に係る負債は75百万円減少したものの、株価上昇による有価証券含み益増加の影響等で繰延税金負債が16億74百万円増加しました。

その結果、固定負債は106億4百万円となり、15億89百万円増加しました。

g. 純資産

純資産は、剰余金の配当により4億82百万円減少しましたが、親会社株主に帰属する当期純利益により39億61百万円増加し、利益剰余金が34億78百万円増加しました。自己株式取得による3百万円減少がありましたが、株主資本は34億75百万円増加しました。その他の包括利益累計額合計は、その他有価証券評価差額金が34億79百万円増加、退職給付に係る調整累計額が3億81百万円増加し、38億60百万円増加しました。

その結果、純資産は1,174億33百万円となり、75億87百万円増加し、純資産比率は46.1%と前連結会計年度末より0.9ポイント上昇しました。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度におけるキャッシュ・フローは、営業活動により79億6百万円増加、投資活動により5百万円減少、財務活動により7億40百万円減少となりました。

この結果、当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前連結会計年度末に比べ71億59百万円増加し、379億46百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローはプラス79億6百万円（前年同期比19億60百万円減）となりました。

これは主に、売上債権の増加11億5百万円、法人税等の支払額15億13百万円があったものの、税金等調整前当期純利益60億77百万円、仕入債務の増加19億12百万円、たな卸資産の減少4億19百万円があったこと等によるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動によるキャッシュ・フローはマイナス5百万円（同22億75百万円増）となりました。

これは主に、有形及び無形固定資産の売却による収入18億95百万円、投資有価証券の売却による収入8億17百万円があったものの、有形及び無形固定資産の取得による支出7億83百万円、投資有価証券の取得による支出16億18百万円、及び、貸付けによる支出6億24百万円があったこと等によるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローはマイナス7億40百万円（同2億33百万円増）となりました。

これは主に、配当金の支払額4億82百万円、リース債務の返済による支出2億36百万円があったこと等によるものであります。

以上の結果により、当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前連結会計年度末に比べ71億59百万円増加し、379億46百万円となりました。

③生産、受注及び販売の実績

a. 商品仕入実績

当社グループはセグメント情報の記載を省略しておりますが、事業別の業績を示すと次のとおりであります。

当連結会計年度の商品仕入実績を事業ごとに示すと、次のとおりであります。

事業の名称	仕入高（百万円）	前年同期比（％）
医薬品等卸販売事業	419,331	101.5
その他事業	280	103.7
合計	419,612	101.5

(注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

b. 販売実績

当社グループはセグメント情報の記載を省略しておりますが、事業別の業績を示すと次のとおりであります。

当連結会計年度の販売実績を事業ごとに示すと、次のとおりであります。

事業の名称	販売高（百万円）	前年同期比（％）
医薬品等卸販売事業	456,238	101.5
その他事業	587	107.3
合計	456,826	101.5

(注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

① 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して作成しております。

その作成には、会計方針の選択・適用、資産・負債及び収益・費用の報告金額及び開示に影響を与える見積りを必要とします。当社グループは、これらの見積りについて過去の実績等を勘案し合理的に判断しておりますが、実際の結果は、見積り特有の不確実性があるため、これらの見積りと異なる場合があります。

当社グループの連結財務諸表で採用する重要な会計方針は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載しておりますが、特に次の重要な会計方針が連結財務諸表作成における重要な見積りの判断に大きな影響を及ぼすと考えております。

a. 貸倒引当金

当社グループは、債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については市場における貸倒リスクと同程度、もしくは貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。お客様の財務状況が悪化し、支払能力が低下した場合、追加引当が必要となる可能性があります。

b. 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務及び退職給付費用は、数理計算上で設定される割引率、将来の給与水準、退職率、死亡率及び年金資産の期待運用収益率等の前提条件に基づいて算出されております。

割引率は、退職給付の支払見込期間及び支払見込期間ごとの金額を反映した単一の加重平均割引率を使用し算出しております。期待運用収益率は年金資産が投資されている資産の期待収益率に基づいて算出されます。実際の結果が前提条件と異なる場合、または前提条件が変更された場合、その影響額は未認識数理計算上の差異として蓄積され、将来にわたって規則的に処理されます。したがって、将来認識される退職給付債務及び退職給付費用に影響を及ぼす可能性があります。

c. 有形・無形固定資産の減損

当社グループは、事業の維持・発展のために有形及び無形の固定資産を有しております。固定資産の減損会計は資産のグルーピングや割引前キャッシュ・フローの総額等を、各企業の固有の事情を反映した合理的な仮定及び予測に基づいて算出しております。将来の地価下落や収益性の低下により、減損処理が追加で必要になった場合、当社グループの業績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

d. 投資有価証券の減損

当社グループは、取引の円滑な遂行や取引関係の維持のため、株式等を所有するケースがあります。これらの株式等には、公開会社のものと非公開会社のものが含まれております。公開会社の株式については、決算日の市場価格が帳簿価格よりも30%以上下落した場合には減損の必要性を検討し、非公開会社の株式については、当該発行体の純資産に占める持分相当額が帳簿価格よりも50%以上下落した場合には減損を計上しております。将来の市況悪化や投資先の業績不振により損失の計上が必要となり、当社グループの業績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

② 当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当連結会計年度におけるわが国経済は、海外の経済回復による輸出増加や生産・製造が持ち直し、企業の収益は堅調に推移しました。また、設備投資や雇用も改善傾向がみられ、景気の緩やかな回復基調が継続いたしました。しかしながら、海外経済の不確実性や金融資本市場の変動のリスクも多く、先行きは依然として不透明な状況が続いております。

このような経営環境の下、当社グループ（当社及び連結子会社）は、中期経営計画「ReBORN F」の最終年度に臨み、再生を目指し、それぞれの事業分野で、新たな収益源への挑戦、過去の慣習からの脱却、次期中計に向けての準備等、3年間の総仕上げに取り組みました。

資本提携等につきましては、5月に株式会社サン・ダイコー（本社 大分市）がブランド魚「かぼすブリ」の養殖を手掛ける重宝水産株式会社（本社 大分県臼杵市）を完全子会社化し、平成27年に設立しました「かんぱち」を養殖する株式会社エフズクリエイト（本社 福岡市博多区）とともに水産事業の拡大を図りました。また、同社は3月に株式会社エフズ農園（本社 大分県日田市）を設立し、子会社で食品製造業の株式会社つえーピー（本社 大分県日田市）で使用する食品原料の安定供給を目的に柚子、茎わさび及び山椒等の栽培事業に着手しました。

グループ経営の面におきましては、子会社7社において代表取締役が交代し、これまでの経営を承継するとともに新たな視点で問題点の解決を図り、さらなる体制強化に努めました。また、株式会社創健（本社 大分市）の主力商品MRE（機能性原料）シリーズに経営資源を注力し、会社間を横断したプロジェクトチームを組んで販売強化に取り組んだ結果、販売目標を達成し、期待を上回る成果をあげることができました。

一方、経営管理面におきましては、グループ各社で事業継続計画マニュアル作成に着手するとともに母店の災害備蓄品の入替、追加等、事業継続計画の拡充を進めました。また、内部統制の一環として、情報セキュリティに取り組む、これまでグループ各社が個々に対応してきたセキュリティ問題について、改めてグループ共通の管理規程を策定し、標準化を図りました。加えて、自家発電機が未整備の事業所に対し、全施設設置5ヵ年計画を策定し、1年目の今年度は7事業所に設置いたしました。一方、社員の高齢化や人手不足に対応すべく、ダイバーシティマネジメントを推進し、子供手当や積立休暇の新設、育児・介護休暇の充実等、関連する人事制度も刷新いたしました。同時に「働き方改革」の一環として、「地域限定営業職」の制度を取り入れることにいたしました。

この結果、当連結会計年度の経営成績について、売上高は4,568億26百万円（前年同期比1.5%増）、売上総利益は372億13百万円（同2.1%増）と前期を上回りました。販売費及び一般管理費は334億83百万円（同1.0%増）となり、営業利益は37億29百万円（同12.6%増）、経常利益は61億55百万円（同11.6%増）と増収増益となりました。税金等調整前当期純利益は60億77百万円（同16.5%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は39億61百万円（同22.2%増）と前期を上回りました。

a. 医薬品等卸販売事業

医療用医薬品分野

医療用医薬品分野におきましては、価格交渉の激化と後発医薬品の需要拡大により厳しい事業環境となりましたが、「医薬品卸」から「医療卸」への進化を加速させるべく、積極的に様々な施策に取り組んでまいりました。その中でも地域包括ケアシステムを支援する活動や、厚生労働省の重症化予防プログラムに沿った潜在患者の早期受診につながる活動など、独自の取り組みは業界でも高い評価を得ることができました。営業員の提案力強化のため導入したMC（メディカルコミュニケーター）制度の成果の確認として「MC大賞」の選出を行い、対象者によるプレゼンテーションは、工夫された独自のアプローチによる営業活動の成功事例として、全営業員への共有化とモチベーション向上につながりました。

物流面におきましては、前年度における得意先戻り品基準の厳格化に引き続き、新たに内部管理として、不用品の廃棄を抑制する不用品管理システムを本格稼働させました。これにより、現状の廃棄額を大幅に削減させることが可能となりました。また、ハンディターミナルを活用した業務管理システム（b A S k e t）の機能を拡大し、出庫→検品→納品までのトレースが整備されました。業務品質向上はもちろんのことお得意様ごとに物流コスト把握と分析ができる環境が整い、物流サービスのあり方を見直す根拠を示すことが可能となりました。

この結果、抗がん剤を中心としたスペシャリティ薬の新製品の寄与等もあり、売上高、売上総利益ともに前年度を上回ることができました。

医療機器等分野

医療機器等分野におきましては、増加する国民医療費を背景に2025年問題に向け、効率的で質の高い医療提供体制（地域包括ケアシステム）への整備が加速し、これまで以上にコスト削減要請が強まってきました。

このような環境の下、医療機器一般消耗品につきましては国立大学病院グループによる全国共同調達が始まり、医療機器一般消耗品の価格下落にますます拍車がかかり、前年度よりさらに厳しい市況となりました。一方、専門分野につきましては内視鏡関連において4K技術や3D技術を搭載した内視鏡システムを中心に販売を促進し、整形外科、心臓外科分野におきましても高齢化による患者数の増加もあり成果につなげることができました。

診断薬部門におきましては、インフルエンザの流行による寄与もありましたが、がん関連治療薬（抗悪性腫瘍剤）とともに使用される医薬品の効果や副作用を予測するコンパニオン診断薬への需要の高まりにより、堅調に推移しました。

医療IT分野におきましては地域医療構想に基づく病棟再編が進む中、病院・診療所、在宅介護の地域包括ケアシステム構築が進み、これらの医療情報連携のニーズに対応するため、各支店へ医療IT専任者を配置し、遠隔診療システム導入支援等に取り組んでまいりました。

この結果、売上高は前年度を上回ることができましたが、売上総利益は厳しい環境を反映し、前年度を下回る結果となりました。

動物用医薬品及び食品等分野

動物用医薬品及び食品等分野におきましては、「共創…企業価値の向上」をスローガンに、既存事業の深化による事業の安定成長及び生産・製造・海外取引事業の領域拡大や新たな業務提携による事業の更なる進化に取り組んでまいりました。

畜産分野では、前年度同様、畜肉相場が堅調に推移したことにより、お得意様の業績も好調で前年度を上回る成果をあげることができました。また株式会社ファイネス（本社 石川県金沢市）が新たに株式会社NPC（本社 東京都千代田区）の出資運営メンバーとして加わり、業務提携先である株式会社アグロジャパン（本社 新潟市）及び株式会社オキチク商事（本社 沖縄県島尻郡）も含めた国内ネットワークの構築は更に一歩前進しました。

水産分野では、魚価の低迷と赤潮の影響により厳しい事業環境となりましたが、重宝水産株式会社を新たにグループに加えるとともに株式会社エフズクリエイトの船舶、生簀を増やし、生産体制の増強と構築を加速しました。

CA（コンパニオンアニマル）分野では、ワクチンの供給不足等もありましたが、福岡エリアの配送機能の強化とともに情報提供機能と受注機能を併せ持つオリジナルWebシステムの広域展開により前年度を上回る成果をあげることができました。

フード分野では、海外からの原材料の輸入販売への積極的な取り組みに加え、新規及び低シェア先の開拓により前年度を上回ることができました。株式会社つえーピーにおきましては、原料の安定確保に向けた新たな体制の構築等、将来需要拡大に向けての取り組みを着実に進めてまいりました。

ライフサイエンス分野では、前年度同様、化粧品・トイレタリー分野の製造メーカー様の成長が継続したことで製品原料の販売が順調に推移するとともに、海外貿易による原材料輸入に積極的に取り組むことで原料品の品揃えが増え、前年度を上回る成果をあげることができました。

この結果、売上高・売上総利益ともに前年度を上回り、経常利益につきましては前年度に続き過去最高益の更新となりました。

一般用医薬品分野

一般用医薬品分野におきましては、「再生と成長」をスローガンに、企業価値の向上と将来性のある新規事業の創造に取り組んでまいりました。営業面では、帳合変更、M&Aや一般店の閉店加速などによる売上の減少もありましたが、広域企業への対応、関東エリアの営業強化、新発売のMREリセルの取り組み及びインバウンド等により、売上は比較的順調に推移しました。またB to C事業では、海外向けのeコマースでの顧客獲得やMREビオスの販促強化による売上の拡大等により、今後の事業の柱として目処を立てることができました。

コスト面では、北海道及び東北物流センターの自社物流の効率化を図るとともに、同業者と共同で配送業務を委託する等配送形態の見直しにより、物流コストの削減を行うことができ、収益改善の道筋をつけることができました。

この結果、売上高は前年度をわずかに下回りましたが、事業構造改革に着手し、黒字化継続に向けた取り組みが奏功し、前年度に続き経常利益は増益となりました。

これらの結果、医薬品等卸販売事業全体としては、売上高は4,562億38百万円（前期比1.5%増）、営業利益は37億9百万円（同13.5%増）と、増収増益となりました。

b. その他事業

その他事業では、売上高は5億87百万円（前期比7.3%増）、営業利益は20百万円（同53.6%減）となりました。

今期、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な連結経営指標としましては、売上高4,550億円（前期比0.4%減）、営業利益29億98百万円（前期比19.6%減）、経常利益52億89百万円（前期比14.1%減）、親会社株主に帰属する当期純利益35億62百万円（前期比10.1%減）を目標といたしました。これを達成するため、四半期ごとに、事業戦略会議を開催し、達成状況の把握・分析、及び具体的な対応の決定を行っております。

当社グループの資本の財源及び資金の流動性につきましては、次のとおりです。

当社グループの運転資金需要のうち主なものは、商品の仕入のほか、販売費及び一般管理費等の営業費用であります。投資を目的とした資金需要は、満期保有目的の債券、子会社株式の取得、並びに、設備投資によるものであります。重要な資本的支出の予定は、「第3 設備の状況 3 設備の新設、除却等の計画」に記載している通りであり、自己資金にてその財源と致します。また、グループ各社における余剰資金の一元管理を図り、資金効率の向上と金融費用の削減を目的として、CMS（キャッシュマネジメントシステム）を導入しており、グループ内の資金融通を行っております。

なお、当連結会計年度末における借入金は、非連結子会社の合併時に引き継いだ30百万円であり、これにリース債務を加えた有利子負債の残高は、2億53百万円となっております。また、当連結会計年度末における現金及び現金同等物の残高は、379億46百万円となっております。

当社グループは医療用医薬品、一般用医薬品、動物用医薬品、医療機器等の卸販売事業ならびにその他事業を行っておりますが、卸販売事業を中心としたほぼ単一のセグメントであるため、セグメント情報の記載を省略しております。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社グループでは、急速な社会環境の変化や販売競争の激化に対処するため、業務全般にわたる標準化と効率化の推進、営業拠点の整備と機能拡充を中心に11億77百万円の設備投資を実施いたしました。

なお、有形固定資産の他、無形固定資産への投資を含めて記載しております。

医薬品等卸販売事業におきましては、その主なものとしましては、(株)アステムで、データベース・サーバー二重化対応3億24百万円、災害復旧サイト構築1億54百万円等の投資を実施しております。

その他事業については、重要な設備投資はありません。

2 【主要な設備の状況】

当社グループの主要な設備の状況は次のとおりであります。

当社グループはセグメント情報の記載を省略しておりますが、事業別の設備の状況を示すと次のとおりであります。

(1) 提出会社

平成30年3月31日現在

事業所名 (所在地)	事業の名称	設備の内容	帳簿価額						従業員数 (人)	
			建物 及び 構築物 (百万円)	機械装置 及び 運搬具 (百万円)	土地		リース 資産 (百万円)	その他 (百万円)		合計 (百万円)
					金額 (百万円)	面積 (千㎡)				
(株)フォレストホールディングス (福岡市博多区)	その他事業	事務所	6	—	1,447	4	—	154	1,608	45 (5)

(2)子会社

平成30年3月31日現在

事業所名 (所在地)	事業の名称	設備の内容	帳簿価額						従業員数 (人)	
			建物及び 構築物 (百万円)	機械装置 及び運搬具 (百万円)	土地		リース資産 (百万円)	その他 (百万円)		合計 (百万円)
					金額 (百万円)	面積 (千㎡)				
㈱アステム 大分本社・ 大分営業部 (大分県大分市)	医薬品等 卸販売事業	事務所・ 倉庫等	1,132	6	1,987 (86)	65 (3)	12	61	3,200	267 (193)
同 福岡営業部 (福岡市博多区)	同上	同上	814	0	1,953	13	3	26	2,798	158 (155)
同 北九州営業部 (北九州市小倉南区)	同上	同上	223	1	1,137	30	14	35	1,412	195 (94)
同 筑後営業部 (福岡県久留米市)	同上	同上	337	5	574	11	3	11	931	83 (57)
同 宮崎営業部 (宮崎県宮崎市)	同上	同上	555	0	1,564 (45)	35 (1)	2	31	2,153	144 (87)
同 鹿児島営業部 (鹿児島県鹿児島市)	同上	同上	551 (5)	18	1,438 (32)	23 (1)	2	14 (2)	2,024	144 (149)
同 熊本営業部 (熊本市中央区)	同上	同上	447	0	845	29	2	13	1,309	138 (115)
同 佐賀営業部 (佐賀県小城市)	同上	同上	202	2	520	13	2	10	738	86 (63)
同 広島営業部 (広島市安佐南区)	同上	同上	353	0	952	12	0	14	1,320	92 (78)
同 山口営業部 (山口県山口市)	同上	同上	202	4	962	28	0	10	1,180	110 (105)
同 九州L I Sセンター (佐賀県鳥栖市)	同上	同上	1,006	105	1,375	30	10	110	2,608	39 (13)
同 OWLセンター (佐賀県鳥栖市)	同上	同上	1,370	61	509	26	0	27	1,970	35 (9)
同 霧島L I Sセンター (鹿児島県霧島市)	同上	同上	1,776	246	85	1	—	95	2,202	3
同 福岡本社 (福岡市博多区)	同上	事務所	6	1	—	—	0	1,091	1,099	122 (15)
㈱リードヘルスケア (北九州市小倉南区)	同上	事務所・ 倉庫等	16 (0) <3>	0	0 (0) <741>	0 (0) <4>	62	36 <0>	116	86 (131)
㈱サン・ダイコー (大分県大分市)	同上	同上	948 <55>	20	1,440 <166>	39 <11>	13	126 <0>	2,548	206 (90)
㈱ダイコー沖縄 (沖縄県宜野湾市)	同上	同上	560 (29)	5	1,298	16	5	20 (0)	1,890	105 (91)
藤村薬品㈱ (長崎県長崎市)	同上	同上	91	0	670	11	48	14	824	126 (111)
㈱フォレストサービス (大分県大分市)	その他事業	事務所	39 (3) <4>	2	46 (46)	0 (0)	6	6 <0>	101	32 (8)

(注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は主として工具器具備品、電話加入権、ソフトウェアであり、建設仮勘定を含んでおります。

2. 上記中()は、連結会社以外への賃貸設備であり内数であります。

3. 上記の他、㈱フォレストホールディングス及び㈱アステムは連結会社以外から、東比恵ビジネスセンタービルを福岡本社事務所として年間92百万円(年間賃貸料)で賃借しております。

また、連結会社以外へ土地14億47百万円(4千㎡)を年間78百万円で貸与しております。

4. 上記中< >は、連結会社からの賃借設備であり外数であります。

5. 従業員数の()は、臨時雇用従業員を外書きしております。

6. 上記の他、連結会社以外からの主要な賃借及びリース設備の内容は、後記のとおりであります。

子会社

会社名 事業所名	所在地	事業の名称	設備の内容	年間賃借及び リース料 (百万円)
(株)アステム 全社	大分県 大分市	医薬品等卸販売事業	営業車両リース (リース)	566
同上	同上	同上	支店事務所倉庫等 (賃借)	119

3 【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資については、景気予測、業界動向、投資効率等を総合的に勘案して策定しております。設備計画は原則的に連結会社各社が個別に策定しておりますが、計画に当たっては提出会社を中心に調整を図っております。

なお、当連結会計年度末における重要な設備の新設等及び除却等の計画は次のとおりであります。

(1) 重要な設備の新設等

会社名 事業所名	所在地	事業の名称	設備の内容	投資予定金額		資金調達 方法	着手年月	完了 予定年月	完成後の 増加能力
				総額 (百万円)	既支払額 (百万円)				
(株)アステム 山口営業部	山口県 山口市	医薬品等 卸販売事業	山口営業部 建物	822	19	自己資金	平成30年 2月	平成31年 3月	—
(株)アステム 鹿屋支店	鹿児島県 鹿屋市	医薬品等 卸販売事業	鹿屋支店 建物	218	4	自己資金	平成29年 12月	平成30年 5月	—

(注) (株)アステムにおいて、前連結会計年度末に計画しておりました別府支店建物の新設、及び熊本営業部建物の除却は延期となり、着手年月は未定となっております。

以上「第3 設備の状況」に記載している金額には、消費税等は含まれておりません。但し、その他のうちの建設仮勘定、及び投資予定金額の既支払額は消費税等を含んでおります。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数 (株)
普通株式	100,000,000
計	100,000,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (平成30年3月31日)	提出日現在発行数 (株) (平成30年6月25日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	37,206,379	37,206,379	非上場・非登録	単元株式数 1,000株 (注)
計	37,206,379	37,206,379	—	—

(注) 当社は、株式の譲渡による取得については取締役会の承認が必要な旨定款に定めております。

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金 増減額 (百万円)	資本金 残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成21年10月1日 (注)	715,527	37,206,379	—	3,000	651	2,151

(注) 上記の増加は、(株)サン・ダイコー、(株)リンテック及び(株)ユニファを完全子会社とする株式交換に伴う新株発行によるものであります。

(5) 【所有者別状況】

平成30年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数1,000株）							単元未満株式の状況 (株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	5	—	63	—	4	1,091	1,163	—
所有株式数 (単元)	—	1,700	—	12,950	—	311	21,929	36,890	316,379
所有株式数の 割合（%）	—	4.60	—	35.10	—	0.84	59.44	100	—

(注) 自己株式2,756,475株は、「個人その他」に2,756単元及び「単元未満株式の状況」に475株を含めて記載しております。

(6) 【大株主の状況】

平成30年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
フォレストホールディングス従業員持株会	大分県大分市西大道二丁目3-8	3,854	11.18
武田薬品工業(株)	大阪府大阪市中央区道修町四丁目1-1	2,402	6.97
第一三共(株)	東京都中央区日本橋本町三丁目5-1	2,329	6.76
エーザイ(株)	東京都文京区小石川四丁目6-10	2,308	6.70
吉村 恭彰	大分県大分市	975	2.83
(株)大分銀行	大分県大分市府内町三丁目4-1	800	2.32
吉村不動産(株)	大分県大分市西大道二丁目3-8	594	1.72
大日本住友製薬(株)	大阪府大阪市中央区道修町二丁目6-8	574	1.66
アステラス製薬(株)	東京都中央区日本橋本町二丁目5-1	570	1.65
吉村 玲子	福岡県北九州市小倉北区	414	1.20
計	—	14,824	43.03

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成30年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 2,756,000	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 34,134,000	34,134	—
単元未満株式	普通株式 316,379	—	—
発行済株式総数	37,206,379	—	—
総株主の議決権	—	34,134	—

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式に含まれている自己株式は次のとおりであります。

自己株式 475株

② 【自己株式等】

平成30年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
(株)フォレストホールディングス	大分県大分市西大道二丁目3-8	2,756,000	—	2,756,000	7.41
計	—	2,756,000	—	2,756,000	7.41

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】

会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
当事業年度における取得自己株式	3,334	3,087,740
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (—)	—	—	—	—
保有自己株式数	2,756,475	—	2,756,475	—

(注) 当期間における保有自己株式には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は、中長期的な視点に立ち、今後とも収益力の向上と経営基盤の強化に努めるとともに、利益配分につきましては、業績の見通し、株式の社内流通価額との妥当性、配当性向、内部留保の状況等を総合的に判断しながら、長期にわたり安定的な配当を維持継続していくことを基本方針としております。

当社は、期末配当として年1回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。

剰余金の配当の決定機関は、取締役会であります。

当期の配当金につきましては、1株につき17円とさせていただきます。

内部留保金につきましては、今後予想される経営環境の変化に対応すべく、財務体質の充実など経営基盤強化のために活用していく予定であります。

当社は、「会社法第459条第1項の規定に基づき、取締役会の決議をもって剰余金の配当を行うことができる。」旨定款に定めております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
平成30年4月27日 取締役会決議	585	17

4 【株価の推移】

当社株式は非上場でありますので、該当事項はありません。

5 【役員 の 状 況】

男性11名 女性0名 (役員のうち女性の比率0%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役社長 (代表取締役)	—	吉村 恭彰	昭和28年10月17日生	昭和55年7月 昭和61年6月 昭和62年6月 平成元年6月 平成3年6月 平成6年4月 平成20年10月 平成26年5月 平成29年4月 平成29年11月	吉村薬品㈱ (現㈱アステム) 入社 同社取締役 同社常務取締役 同社専務取締役 同社代表取締役副社長 同社代表取締役社長 当社代表取締役社長 (現任) ㈱サン・ダイコー取締役会長 (現任) ㈱アステム代表取締役会長 (現任) 大分商工会議所会頭	下記(注) 4記載のとおり	975
取締役副社長 (代表取締役)	—	吉村 次生	昭和31年5月10日生	昭和58年4月 平成10年4月 平成11年4月 平成15年6月 平成17年4月 平成20年10月 平成21年4月 平成29年4月	吉村薬品㈱ (現㈱アステム) 入社 同社取締役 同社常務取締役 同社代表取締役専務 同社代表取締役副社長 当社取締役 当社代表取締役副社長 (現任) ㈱アステム代表取締役社長 (現任)	下記(注) 4記載のとおり	381
取締役 常務執行役員	統括 本部長	北林 隆男	昭和33年10月10日生	昭和57年3月 平成16年4月 平成19年5月 平成23年4月 平成24年6月 平成27年4月 平成28年4月 平成28年6月 平成29年4月	吉村薬品㈱ (現㈱アステム) 入社 同社人事部長 当社執行役員経営企画部長 ㈱アステム執行役員業務本部長 兼 物流管理部長 同社取締役 同社執行役員管理本部管理ユニット統括 兼 人事総務部長 同社取締役執行役員管理本部長 (現任) 当社取締役 当社取締役常務執行役員統括本部長 (現任)	下記(注) 4記載のとおり	1
取締役執行役員	経営 企画部長	江口 竜次	昭和39年7月9日生	昭和63年3月 平成21年4月 平成26年4月 平成30年6月	吉村薬品㈱ (現㈱アステム) 入社 当社経営企画部長 当社執行役員経営企画部長 当社取締役執行役員経営企画部長 (現任)	下記(注) 4記載のとおり	—
取締役	—	川上 眞吾	昭和29年10月16日生	昭和48年3月 平成20年4月 平成21年6月 平成25年4月 平成25年4月	吉村薬品㈱ (現㈱アステム) 入社 ㈱リードヘルスケア代表取締役社長 当社取締役 (現任) 当社海外事業担当 ㈱サン・ダイコー代表取締役社長 (現任)	下記(注) 4記載のとおり	20

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役	—	鈴木 賢	昭和23年6月11日生	昭和49年2月 昭和55年5月 昭和58年4月 昭和62年10月 昭和63年6月 平成2年4月 平成6年4月 平成12年6月 平成20年10月 平成27年6月 平成27年6月	(株)鈴彦(現(株)バイタルネット)入社 同社取締役 同社常務取締役 同社専務取締役 同社代表取締役専務 同社代表取締役副社長 同社代表取締役社長 (株)アステム取締役 当社取締役(現任) (株)バイタルネット代表取締役会長(現任) (株)バイタルケーエスケー・ホールディングス代表取締役会長(現任)	下記(注) 4記載のとおり	20
取締役	—	眞鍋 雅昭	昭和17年11月27日生	昭和40年4月 昭和46年10月 昭和48年10月 昭和52年4月 昭和59年9月 昭和62年9月 平成3年4月 平成13年6月 平成19年6月 平成20年10月 平成27年6月	(株)一の眞鍋五郎薬局(現(株)ほくやく)入社 同社取締役 同社常務取締役 同社専務取締役 同社代表取締役専務 同社代表取締役副社長 同社代表取締役社長 (株)アステム取締役 (株)ほくやく・竹山ホールディングス代表取締役社長執行役員 当社取締役(現任) (株)ほくやく・竹山ホールディングス代表取締役社長(現任)	下記(注) 4記載のとおり	10
常勤監査役	—	平野 和之	昭和29年10月23日生	昭和55年8月 平成19年5月 平成20年5月 平成21年5月 平成22年4月 平成22年4月 平成29年6月	コーヤク(株)(現(株)アステム)入社 (株)ダイコー沖繩取締役管理本部長兼営業副本部長 同社常務取締役営業本部長 同社取締役専務営業本部長 同社代表取締役社長 (株)アステム取締役 当社監査役(現任)	下記(注) 5記載のとおり	1
常勤監査役	—	吉松 淳次	昭和27年4月17日生	昭和57年4月 平成4年4月 平成14年5月 平成18年4月 平成23年4月 平成30年6月	ヨシマツ薬品(株)(現(株)アステム)入社 (株)ダイコー(現(株)アステム)取締役 (株)リンテック代表取締役専務 同社取締役社長 (株)九州オープンラボラトリーズ代表取締役社長 当社監査役(現任)	下記(注) 6記載のとおり	267
監査役	—	岩崎 哲朗	昭和25年2月16日生	昭和52年4月 昭和53年4月 平成18年6月 平成20年10月	弁護士登録 岩崎哲朗法律事務所(現弁護士法人アゴラ)開設 (株)アステム監査役 当社監査役(現任)	下記(注) 5記載のとおり	5
監査役	—	濱田 健一	昭和23年10月23日生	昭和50年4月 平成19年7月 平成20年7月 平成21年6月	名古屋国税局入局 熊本国税局三重税務署長 同署退職 当社監査役(現任)	下記(注) 5記載のとおり	1
計							1,682

- (注) 1. 取締役 鈴木 賢、眞鍋雅昭は、社外取締役であります。
2. 監査役 岩崎哲朗、濱田健一は、社外監査役であります。
3. 代表取締役副社長 吉村次生は、代表取締役社長 吉村恭彰の実弟であります。
4. 平成30年6月22日開催の定時株主総会の終結の時から1年間。
5. 平成28年9月8日開催の臨時株主総会の終結の時から4年間。
6. 平成30年6月22日開催の定時株主総会の終結の時から2年間。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

(コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方)

当社では、コーポレート・ガバナンスを当社個別の課題であると同時にグループ全体としての重要課題であると認識しております。経営の透明性の向上とコンプライアンス重視の経営を徹底するため、コーポレート・ガバナンスの充実を図りながら、経営環境の変化に迅速に対応できる組織体制を構築することを主眼とし機構改革を実施しております。

(1) 会社の経営上の意思決定、執行及び監督に係わる経営管理組織その他のコーポレート・ガバナンス体制の状況

① 社外取締役、社外監査役の選任状況

当社では、法律に基づく委員会等の設置はしておらず、従来からの監査役制度を引き続き採用しております。また、監査役は3名以上とする旨定款に定めております。当社の監査役会は4名で構成されており、うち2名が社外監査役であり、2名は常勤監査役として常時執務しております。常勤監査役および非常勤監査役は取締役会に常時出席しており、常勤監査役は、その他の社内及びグループの重要会議にも積極的に参加しております。

取締役は3名以上とする旨定款に定めております。取締役会については、取締役総数7名のうち2名が社外取締役であり、当社の業務執行に携わらない社外役員を積極的に採用することで、適時適切なアドバイスを受けるとともに、経営の監督機能の強化に努めております。なお、取締役の任期は1年間であり、環境変化への対応と責任及び評価の明確化を図っております。

② 執行役員制度の導入

また、経営における意思決定の迅速化と業務執行に対する監督機能強化をめざして執行役員制度を導入しております。これにより、取締役会は経営の監視・監督機能の強化を図り、その管理統制のもとに執行役員が業務執行を担う体制となっております。

③ グループ経営の意思決定機能の強化

グループ全体の戦略策定やトップマネジメントの戦略策定機能を強化するため、グループ会社の代表取締役を含めたグループ経営会議を定期的に行い、グループ経営に関する重要事項の検討、情報の共有化を図っております。

④ 子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社はフォレストグループ子会社に対して、業務の適正を確保するための体制を整備しております。

子会社は、重要な事項については当社の承認を得ることとし、フォレストグループの連携体制を確立しております。主要な子会社においては、監査役制度を採用し、複数の監査役が取締役の職務執行行為を監査することによってその実効性を高めるべく、合同監査役会を開催しております。

監査役は、取締役会をはじめ各種重要な会議に出席し、取締役の職務執行を監査する体制をとっております。また、グループ監査役会を開催し、各社の監査役との情報の共有化、連携の強化を図り、各社の経営状況等について報告を求めることとしております。

当社の内部監査部は「内部監査規程」に則り、関係会社も対象として監査を統括又は実施し、横断的なリスク管理体制及びコンプライアンス体制の構築を図り、一体的に業務の適正化を確保しております。

⑤ コンプライアンス体制の状況

当社では、法令はもとより社会規範の遵守や企業倫理の確立を図るための種々の施策について検討し、段階的に実行に移しております。会社における不祥事等のリスク発生を未然に防止するための内部統制システムとして、内部監査部を設置しており、事業活動の全般に関し、方針・計画・手続の妥当性や業務実施の有効性、法律・法令の遵守状況等について内部監査を実施し、事業の質的向上に向け具体的な助言・勧告を行っております。また、社長を委員長とするフォレストグループコンプライアンス委員会を設置し、コンプライアンス推進体制の更なる整備と維持向上に努めております。

⑥ 内部統制システムの整備状況

会社法及び会社法施行規則に基づき、内部統制基本方針を掲げ当社の業務の適正を確保するための体制を整備しております。また、内部統制システムの構築・維持・向上を推進するとともに、必要に応じて各担当部署にて、規則・ガイドラインの策定・研修を実施しております。

⑦ 内部監査、監査役監査及び会計監査の相互連携について

当社の内部監査及び監査役監査の組織は、内部監査部が7名、監査役会が4名で構成しております。

監査役および内部監査部は、監査計画及び、監査結果等について定期的に報告会を行い、お互いに情報交換を行うことで連携強化を図っております。会計監査人との連携に関しましては、監査役は会計監査人の監査計画、重点項目を確認するほか、内部監査部と連携して適宜会計監査人監査に立ち会うなど、日頃より会計監査人との間で意見交換を密に行っております。

⑧ 弁護士等その他第三者の状況（会社のコーポレート・ガバナンス体制への関与）

当社では、コンプライアンス体制の強化に向けて、複数の法律顧問契約を結び、日常発生する法律問題全般に関してアドバイスと指導を受けられる体制を設けております。また税務面では、福田会計事務所と税務顧問契約を結んでおり、定期的に税務監査を受けております。

⑨ 会計監査の状況

当社の会計監査業務を執行した公認会計士は、貞閑・大石公認会計士共同事務所 公認会計士 貞閑 孝也氏、貞閑・大石公認会計士共同事務所 公認会計士 大石 聡氏及び貞閑・大石公認会計士共同事務所 公認会計士 川野 嘉久氏であり、通常の会計監査に加え、重要な会計的課題について随時相談・検討を実施しております。また、監査業務に係る補助者の構成は、公認会計士5名、その他1名で構成されております。

なお、監査証明に対する審査体制としては、他の公認会計士による審査を受けております。

(2) 会社と会社の社外取締役及び社外監査役の人的関係、資本的関係または取引関係その他の利害関係の概要

当社の社外取締役2名は、当社と業務提携関係にあるそれぞれ2社の代表取締役を兼務しております。また、社外監査役2名のうち1名は税理士、もう1名は弁護士であり、当社との利害関係、取引関係はありません。

当社と社外取締役及び社外監査役は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令が規定する額としております。

(3) 会社のコーポレート・ガバナンスの充実に向けた取り組みの最近一年間（最近事業年度の末日からさかのぼって1カ年）における実施状況

当社の経営戦略の立案を担当する経営企画部を中心に、当社におけるコーポレート・ガバナンスのあり方やグループ全体を視野に入れた経営管理体制の在り方、企業倫理の遵守等について引き続き検討を重ねております。

その結果として、前述の通り、執行役員制度や取締役の員数削減、取締役の任期1年制、ならびに社外監査役や社外取締役の選任等を柱とした経営機構改革を継続しております。また、会社法に伴う「業務の適正を確保するための体制」について、取締役会にて決議した基本方針に沿って内部統制の強化に取り組んでおります。特に、主要子会社を含めたグループ全体の内部統制体制を強化していくために、監査役、内部監査部や内部統制部が、グループ各社主要会議への出席や外部監査の立会いを行い、各社のモニタリングを行うとともに、各社間の情報共有と連携を図っております。さらに、リスク管理の強化をめざして主要なグループ各社の内部監査を実施しております。

今後とも、現状の経営管理体制に甘んじることなく、経営の透明性の向上と法令遵守の経営を徹底していくために、各種委員会（委員会等設置会社ではないため、法律に基づかない委員会）等の設置を含め、積極的に革新的な取り組みを継続して実施してまいります。

(4) 取締役及び監査役に支払った報酬等の総額

区分	支給人員	支給額
取締役 (うち社外取締役)	8名 (2名)	81百万円 (7百万円)
監査役 (うち社外監査役)	5名 (2名)	35百万円 (5百万円)
合計	13名	117百万円

(注) 1. 取締役の支給額には、使用人兼務取締役の使用人分給与は含まれておりません。

2. 取締役の報酬等の額は、平成21年6月19日開催の第1期定時株主総会での決議により年額1億50百万円以内となっております。

3. 監査役の報酬等の額は、平成21年6月19日開催の第1期定時株主総会での決議により年額50百万円以内となっております。

4. 上記の支給額には、以下のものが含まれております。

・当事業年度における役員賞与引当金の繰入額7百万円

取締役 4名 4百万円

監査役 4名 2百万円（うち社外監査役 2名 0百万円）

5. 当事業年度に支払った役員退職慰労金

該当事項はありません。

6. 社外役員が親会社及び子会社等から受けた役員報酬等の総額

該当事項はありません。

7. 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

8. 役員報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針

取締役の報酬等の総額は、株主総会の決議により定めております。取締役の報酬等については、基本報酬と賞与により構成されており、基本報酬については予め取締役会において決定した当社内規に基づき役位に応じて支給することになっております。また、賞与については各事業年度の連結業績を勘案し、取締役会において支給総額を決定することになっております。なお、賞与の個別支給金額については代表取締役社長に一任されております。

監査役の報酬等の総額は、株主総会の決議により定めております。なお、各監査役の個別支給金額については監査役の協議により決定しております。

(5) 取締役及び監査役の選任の決議要件

当社は、取締役及び監査役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨、また、取締役については累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

(6) 株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

① 取締役、監査役、会計監査人の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役、監査役、会計監査人（取締役、監査役、会計監査人であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨を定款に定めております。これは、取締役、監査役、会計監査人が期待される役割を十分に発揮できることを目的とするものであります。

② 剰余金の配当等の決定機関

当社は、剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項について、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議により定める旨定款に定めております。これは、剰余金の配当等を取締役会の権限とすることにより、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

(7) 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(8) 責任限定契約の内容の概要

当社は社外監査役との間において、会社法第427条第1項の規定により、会社法第423条第1項の賠償責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく賠償責任の限度額は、法令の定める最低責任限度額としております。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	19	—	19	—
連結子会社	15	—	15	—
計	35	—	35	—

② 【その他重要な報酬の内容】

(前連結会計年度)

当社の連結子会社で、当社と異なる監査公認会計士への報酬の支払いはありません。

(当連結会計年度)

当社の連結子会社で、当社と異なる監査公認会計士への報酬の支払いはありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

(前連結会計年度)

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務はありません。

(当連結会計年度)

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針としましては、監査委嘱者（株式会社フォレストホールディングス）と監査受嘱者（貞閑・大石公認会計士共同事務所）とで会社法所定の会計監査人の欠格事由のないこと並びに公認会計士法上の著しい利害関係その他の同法の業務制限に当たらないこと、金融商品取引法の定める特別の利害関係のないこと、及び日本公認会計士協会倫理規則に基づく独立性の保持を確認し、双方の同意の下、締結した監査契約書によるものであります。

第5 【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号。）に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の財務諸表について、貞閑・大石公認会計士共同事務所 公認会計士 貞閑 孝也氏、貞閑・大石公認会計士共同事務所 公認会計士 大石 聡氏及び貞閑・大石公認会計士共同事務所 公認会計士 川野 嘉久氏により監査を受けております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※3 7,860	※3 40,022
受取手形及び売掛金	95,161	※6 96,252
電子記録債権	116	※6 130
有価証券	25,500	—
商品及び製品	27,135	26,716
繰延税金資産	523	669
その他	9,801	10,243
貸倒引当金	△855	△737
流動資産合計	165,243	173,298
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	※3 11,380	※3 10,643
機械装置及び運搬具（純額）	566	482
土地	※3 20,555	※3 18,811
リース資産（純額）	321	191
建設仮勘定	403	57
その他（純額）	592	912
有形固定資産合計	※2 33,819	※2 31,099
無形固定資産		
その他	1,074	967
無形固定資産合計	1,074	967
投資その他の資産		
投資有価証券	※1, ※3 38,101	※1, ※3 44,789
長期貸付金	1,497	1,759
退職給付に係る資産	—	223
繰延税金資産	1	10
その他	3,598	3,372
貸倒引当金	△491	△507
投資損失引当金	△27	△118
投資その他の資産合計	42,679	49,529
固定資産合計	77,573	81,596
資産合計	242,817	254,895

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (平成30年 3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	※3 116,635	※3,※6 118,191
電子記録債務	2,789	※6 3,146
リース債務	235	106
未払法人税等	746	1,376
賞与引当金	951	1,134
役員賞与引当金	31	34
返品調整引当金	103	104
繰延税金負債	0	—
その他	2,462	2,762
流動負債合計	123,956	126,857
固定負債		
長期借入金	30	30
リース債務	160	116
長期前受収益	—	12
退職給付に係る負債	75	—
繰延税金負債	8,276	9,950
その他	472	493
固定負債合計	9,014	10,604
負債合計	132,971	137,461
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,000	3,000
資本剰余金	3,859	3,859
利益剰余金	84,231	87,710
自己株式	△2,505	△2,508
株主資本合計	88,585	92,061
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	17,774	21,253
退職給付に係る調整累計額	△88	292
その他の包括利益累計額合計	17,685	21,546
非支配株主持分	3,575	3,825
純資産合計	109,845	117,433
負債純資産合計	242,817	254,895

② 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高	450,055	456,826
売上原価	413,604	419,612
売上総利益	36,451	37,213
販売費及び一般管理費		
報酬及び給料手当	16,656	16,784
荷造運搬費	2,370	2,583
福利厚生費	3,265	3,366
減価償却費	1,769	1,658
貸倒引当金繰入額	284	—
賞与引当金繰入額	951	1,134
役員賞与引当金繰入額	31	34
退職給付費用	973	909
その他	6,836	7,011
販売費及び一般管理費合計	33,139	33,483
営業利益	3,312	3,729
営業外収益		
受取利息	110	114
受取配当金	645	671
受取手数料	980	1,011
持分法による投資利益	116	136
不動産賃貸料	203	180
貸倒引当金戻入額	—	75
その他	253	271
営業外収益合計	2,310	2,460
営業外費用		
支払利息	2	2
貸倒引当金繰入額	36	—
その他	66	33
営業外費用合計	105	35
経常利益	5,516	6,155

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
特別利益				
固定資産売却益	※1	38	※1	228
投資有価証券売却益		42		100
投資損失引当金戻入額		6		—
受取補償金		—		31
特別利益合計		87		361
特別損失				
固定資産売却損		—	※2	41
固定資産除却損	※3	80	※3	92
減損損失	※4	6	※4	162
投資有価証券評価損		217		51
投資損失引当金繰入額		—		91
抱合せ株式消滅差損	※5	73		—
災害による損失	※6	6		—
損害補償損失		2		—
特別損失合計		386		439
税金等調整前当期純利益		5,217		6,077
法人税、住民税及び事業税		1,790		2,167
法人税等調整額		58		△227
法人税等合計		1,848		1,939
当期純利益		3,369		4,137
非支配株主に帰属する当期純利益		128		175
親会社株主に帰属する当期純利益		3,241		3,961

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当期純利益	3,369	4,137
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	2,009	3,556
退職給付に係る調整額	809	393
持分法適用会社に対する持分相当額	10	4
その他の包括利益合計	※1 2,828	※1 3,954
包括利益	6,197	8,091
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	6,031	7,822
非支配株主に係る包括利益	166	269

③ 【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,000	3,859	81,403	△2,498	85,764
当期変動額					
剰余金の配当			△551		△551
親会社株主に帰属する当期純利益			3,241		3,241
合併による増加			138		138
自己株式の取得				△7	△7
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	2,828	△7	2,820
当期末残高	3,000	3,859	84,231	△2,505	88,585

	その他の包括利益累計額			非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	15,767	△872	14,895	3,426	104,086
当期変動額					
剰余金の配当					△551
親会社株主に帰属する当期純利益					3,241
合併による増加					138
自己株式の取得					△7
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	2,006	783	2,790	148	2,938
当期変動額合計	2,006	783	2,790	148	5,759
当期末残高	17,774	△88	17,685	3,575	109,845

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,000	3,859	84,231	△2,505	88,585
当期変動額					
剰余金の配当			△482		△482
親会社株主に帰属する当期純利益			3,961		3,961
合併による増加					—
自己株式の取得				△3	△3
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	—	3,478	△3	3,475
当期末残高	3,000	3,859	87,710	△2,508	92,061

	その他の包括利益累計額			非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	17,774	△88	17,685	3,575	109,845
当期変動額					
剰余金の配当					△482
親会社株主に帰属する当期純利益					3,961
合併による増加					—
自己株式の取得					△3
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	3,479	381	3,860	250	4,111
当期変動額合計	3,479	381	3,860	250	7,587
当期末残高	21,253	292	21,546	3,825	117,433

④ 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	5,217	6,077
減価償却費	1,769	1,658
減損損失	6	162
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	311	270
賞与引当金の増減額 (△は減少)	△10	183
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	△21	2
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	291	△103
受取利息及び受取配当金	△756	△786
支払利息	2	2
持分法による投資損益 (△は益)	△116	△136
投資有価証券売却損益 (△は益)	△42	△100
投資有価証券評価損益 (△は益)	217	51
有形及び無形固定資産除売却損益 (△は益)	△6	△133
抱合せ株式消滅差損益 (△は益)	73	—
売上債権の増減額 (△は増加)	5,889	△1,105
たな卸資産の増減額 (△は増加)	1,865	419
差入保証金の増減額 (△は増加)	18	225
その他の資産の増減額 (△は増加)	531	△513
仕入債務の増減額 (△は減少)	△3,053	1,912
その他	△311	509
小計	11,874	8,596
利息及び配当金の受取額	791	826
利息の支払額	△2	△2
法人税等の支払額	△2,797	△1,513
営業活動によるキャッシュ・フロー	9,866	7,906
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△604	△3
定期預金の払戻による収入	600	—
有形及び無形固定資産の取得による支出	△1,423	△783
有形及び無形固定資産の売却による収入	128	1,895
投資有価証券の取得による支出	△775	△1,618
投資有価証券の売却による収入	59	817
貸付けによる支出	△513	△624
貸付金の回収による収入	248	311
投資活動によるキャッシュ・フロー	△2,280	△5
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入れによる収入	—	1,000
短期借入金の返済による支出	—	△1,000
自己株式の取得による支出	△7	△3
配当金の支払額	△551	△482
非支配株主への配当金の支払額	△18	△18
リース債務の返済による支出	△397	△236
財務活動によるキャッシュ・フロー	△974	△740
現金及び現金同等物に係る換算差額	—	△0
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	6,611	7,159
現金及び現金同等物の期首残高	24,009	30,786
非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額	165	—
現金及び現金同等物の期末残高	※1 30,786	※1 37,946

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 6社

連結子会社は、(株)アステム、(株)リードヘルスケア、(株)サン・ダイコー、(株)ダイコー沖縄、藤村薬品(株)、(株)フォレストサービスの6社であります。

(2) 非連結子会社名

非連結子会社は、(株)ケンミン、(株)メディクリーン、(株)グリーンウェーブ、(株)スターネット、協和化学(株)、うすき製薬(株)、(株)セーフマスター、(株)ohana本舗、(株)ニチメン工業、(株)沖縄三和メディカル、(株)つえーピー、(株)エフズクリエイト、(株)シンガサナ・ウナギ・インドネシア、(株)けやき、(株)創健、(株)西日本ジェネリック、東京バイテック(株)、ジェイシード(株)、(株)ネクスト、重宝水産(株)、(株)エフズ農園の21社であります。

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社21社は、いずれも小規模会社であり、合計の総資産、売上高、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないためであります。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した関連会社 1社

(株)九州オープンラボラトリーズ

(2) 持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社

持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社(株)コア・クリエイトシステム他9社は、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性が無いため持分法の適用範囲から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、すべて連結決算日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

①有価証券

・満期保有目的の債券

償却原価法(定額法)を採用しております。

・その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

②たな卸資産

最終仕入原価法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

①有形固定資産（リース資産を除く）

定率法を採用しております。

ただし、平成10年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物	3～50年
機械装置及び運搬具	5～17年
その他	5～20年

②無形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づいております。

③長期前払費用

定額法を採用しております。

④リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

①貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については市場における貸倒リスクと同程度、もしくは貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

②投資損失引当金

子会社への投資に係る損失に備えるため、当該会社の財政状態を勘案して必要額を引当計上しております。

③賞与引当金

従業員（管理職を除く）の賞与支給に備えるため、翌連結会計年度賞与支給見込額のうち当連結会計年度に負担すべき額（夏季賞与支給見込額）を計上しております。

④役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えて、当連結会計年度における支給見込額を計上しております。

⑤返品調整引当金

当連結会計年度売上高に対して翌連結会計年度以降予想される返品に備えて、法人税法の規定による繰入限度相当額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の日から翌連結会計年度から費用処理することとしております。

未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用については、税効果を調整の上、純資産の部におけるその他包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額に計上しております。

(5) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(6) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理方法

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっており、資産に係る控除対象外消費税及び地方消費税は当連結会計年度の費用として処理しております。

(未適用の会計基準等)

(税効果会計関係)

- ・「税効果会計に係る会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第28号 平成30年2月16日)
- ・「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第26号 平成30年2月16日)

(1) 概要

個別財務諸表における子会社株式等に係る将来加算一時差異の取扱いが見直され、また(分類1)に該当する企業における繰延税金資産の回収可能性に関する取扱いの明確化が行われております。

(2) 適用予定日

平成31年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時においてありません。

(収益認識に関する会計基準)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日)

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

ステップ1: 顧客との契約を識別する。

ステップ2: 契約における履行義務を識別する。

ステップ3: 取引価格を算定する。

ステップ4: 契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5: 履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

平成34年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(連結貸借対照表関係)

※1 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券(株式)	4,376百万円	6,339百万円

※2 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
有形固定資産の減価償却累計額	20,625百万円	20,202百万円

※3 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
建物及び構築物	332百万円	69百万円
土地	2,036百万円	986百万円
投資有価証券	772百万円	1,305百万円
定期預金	74百万円	59百万円
計	3,216百万円	2,420百万円

担保付債務は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
支払手形及び買掛金	1,441百万円	1,691百万円
計	1,441百万円	1,691百万円

4 偶発債務

連結会社以外の会社の金融機関からの借入金等に対して次のとおり保証を行っております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)		当連結会計年度 (平成30年3月31日)
うすき製薬(株)	3百万円	うすき製薬(株)	0百万円
(株)宮の陣薬局	181百万円	(株)宮の陣薬局	168百万円
(株)ケンミン	0百万円	(株)ケンミン	0百万円
(株)創健	一百万円	(株)創健	3百万円
重宝水産(株)	一百万円	重宝水産(株)	50百万円
計	185百万円	計	222百万円

5 当社及び連結子会社においては、運転資金の効率的な調整を行うため取引銀行3行と当座貸越契約を締結しております。これら契約に基づく連結会計年度末の借入未実行残高は次の通りであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
当座貸越極度額の総額	21,200百万円	21,200百万円
借入実行残高	一百万円	一百万円
差引額	21,200百万円	21,200百万円

※6 期末日満期手形の会計処理については、満期日に決済が行われたものとして処理しております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
受取手形	一百万円	163百万円
電子記録債権	一百万円	66百万円
支払手形	一百万円	129百万円
電子記録債務	一百万円	627百万円

(連結損益計算書関係)

※1 固定資産売却益の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物及び構築物	－百万円	228百万円
機械装置及び運搬具	－百万円	0百万円
土地	38百万円	－百万円
計	38百万円	228百万円

※2 固定資産売却損の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
土地	－百万円	41百万円
計	－百万円	41百万円

※3 固定資産除却損の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物及び構築物	32百万円	73百万円
機械装置及び運搬具	0百万円	10百万円
建設仮勘定	28百万円	－百万円
その他(有形固定資産)	1百万円	0百万円
その他(無形固定資産)	18百万円	7百万円
計	80百万円	92百万円

※4 減損損失

当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

場所	用途	種類	減損損失 (百万円)
広島県広島市事業所等5カ所	事業用資産	土地等	6

資産のグルーピングは、事業用資産については営業拠点単位で、賃貸用資産及び遊休資産については個別物件単位で行っております。

事業用資産については、収益性の悪化が見られると同時に短期間において収益性の回復が見込まれない物件について、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

賃貸用資産については、賃料の下落及び継続的な地価の下落により、収益性が著しく下落した資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

※減損損失の内訳

・事業用資産 6(内、建物及び構築物0、土地1、有形リース資産2、その他1)百万円

なお、各資産グループの回収可能価額は、正味売却価額または使用価値により測定しており、正味売却価額は、主として公示価額等を基準として評価し、使用価値については将来キャッシュ・フローを3%で割り引いて算定しております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

場所	用途	種類	減損損失 (百万円)
山口県山口市事業所等8カ所	事業用資産	建物及び構築物等	162

資産のグルーピングは、事業用資産については営業拠点単位で、賃貸用資産及び遊休資産については個別物件単位で行っております。

事業用資産については、収益性の悪化が見られると同時に短期間において収益性の回復が見込まれない物件について、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

賃貸用資産については、賃料の下落及び継続的な地価の下落により、収益性が著しく下落した資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

※減損損失の内訳

- ・事業用資産 162（内、建物及び構築物127、機械装置及び運搬具0、土地10、有形リース資産2、その他（有形固定資産）20、その他（無形固定資産）1）百万円

なお、各資産グループの回収可能価額は、正味売却価額または使用価値により測定しており、正味売却価額は、主として公示価額等を基準として評価し、使用価値については将来キャッシュ・フローを3%で割引いて算定しております。

※5 抱合せ株式消滅差損

前連結会計年度に連結子会社である株式会社アステムが非連結子会社である株式会社井上本店を吸収合併したことに伴い計上したものであります。

※6 災害による損失

前連結会計年度に発生した熊本地震により、連結子会社である株式会社リードヘルスケアの熊本営業所が被災したもので、その内訳は次のとおりであります。

- ・商品 6百万円

(連結包括利益計算書関係)

※1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	(百万円)	
	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	3,266	5,226
組替調整額	—	△100
税効果調整前	3,266	5,126
税効果額	△1,256	△1,569
その他有価証券評価差額金	2,009	3,556
退職給付に係る調整額		
当期発生額	847	279
組替調整額	329	290
税効果調整前	1,176	570
税効果額	△367	△177
退職給付に係る調整額	809	393
持分法適用会社に対する持分相当額		
当期発生額	7	2
組替調整額	2	1
持分法適用会社に対する持分相当額	10	4
その他の包括利益合計	2,828	3,954

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自平成28年4月1日至平成29年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期 首株式数(千株)	当連結会計年度増 加株式数(千株)	当連結会計年度減 少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)
発行済株式				
普通株式	37,206	—	—	37,206
合計	37,206	—	—	37,206
自己株式				
普通株式	2,745	7	—	2,753
合計	2,745	7	—	2,753

(注) 自己株式の数の増加 7千株は、単元未満株式の買取りによる増加7千株であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当 額(円)	基準日	効力発生日
平成28年4月28日 取締役会	普通株式	551	16	平成28年3月31日	平成28年6月10日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成29年4月28日 取締役会	普通株式	482	利益剰余金	14	平成29年3月31日	平成29年6月9日

当連結会計年度(自平成29年4月1日至平成30年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期 首株式数(千株)	当連結会計年度増 加株式数(千株)	当連結会計年度減 少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)
発行済株式				
普通株式	37,206	—	—	37,206
合計				
自己株式				
普通株式	2,753	3	—	2,756
合計	2,753	3	—	2,756

(注) 自己株式の数の増加 3千株は、単元未満株式の買取りによる増加3千株であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当 額(円)	基準日	効力発生日
平成29年4月28日 取締役会	普通株式	482	14	平成29年3月31日	平成29年6月9日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成30年4月27日 取締役会	普通株式	585	利益剰余金	17	平成30年3月31日	平成30年6月8日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
現金及び預金	7,860百万円	40,022百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	△2,073百万円	△2,076百万円
取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する譲渡性 預金(有価証券)	25,000百万円	一百万円
現金及び現金同等物	30,786百万円	37,946百万円

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

(借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

① リース資産の内容

有形固定資産

主として、営業用車両(機械装置及び運搬具)であります。

② リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2 オペレーティング・リース取引

(貸主側)

オペレーティング・リース取引のうち、解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
1年内	78	78
1年超	3,185	3,107
合計	3,263	3,185

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

① 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用規程に従い、安全かつ有利に運用することにより、経営上必要な収益及び長期的な資産形成を図ることを原則として運用を行っております。一時的な余剰資金は主に流動性の高い金融資産で運用しております。

② 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。

投資有価証券は、満期保有目的の債券及び業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

③ 金融商品に係るリスク管理体制

i 信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社及び連結子会社は、債権管理規程に従い、営業債権及び貸付金について、各事業会社における営業管理担当部門が取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高管理をするとともに、財務状況の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。

ii 市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

投資有価証券については、定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状態等を把握し、市況や取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

iii 資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

当社は、連結子会社及び各部署からの報告に基づき担当部署が適時に資金繰り計画を作成・更新するとともに、手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理しております。

④ 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません（注2を参照ください。）。

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	7,860	7,860	—
(2) 受取手形及び売掛金	95,161	95,161	—
(3) 有価証券	25,500	25,506	6
(4) 投資有価証券	34,583	34,625	41
資産計	163,105	163,154	48
(1) 支払手形及び買掛金	116,635	116,635	—
負債計	116,635	116,635	—

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	40,022	40,022	—
(2) 受取手形及び売掛金	96,252	96,252	—
(3) 有価証券	—	—	—
(4) 投資有価証券	40,911	40,930	19
資産計	177,187	177,206	19
(1) 支払手形及び買掛金	118,191	118,191	—
負債計	118,191	118,191	—

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 有価証券、(4) 投資有価証券

これらの時価について、株式等は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格又は取引金融機関等から提示された価格によっております。

なお、電子記録債権、長期貸付金については、重要性が乏しいため記載を省略しております。

負 債

(1) 支払手形及び買掛金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

なお、電子記録債務、リース債務、長期借入金については、重要性が乏しいため記載を省略しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
非上場株式等 (*1)	3,499	3,871
組合出資金 (*2)	17	6

(*1) 非上場株式等については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、時価開示の対象とはしていません。

(*2) 組合出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしていません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度 (平成29年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	7,860	—	—	—
受取手形及び売掛金	95,156	5	—	—
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの	25,000	—	—	—
満期保有目的の債券	500	2,000	400	—
合計	128,516	2,005	400	—

当連結会計年度 (平成30年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	40,022	—	—	—
受取手形及び売掛金	96,252	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの	—	—	—	—
満期保有目的の債券	—	3,300	100	—
合計	136,275	3,300	100	—

(有価証券関係)

有価証券

1 満期保有目的の債券

前連結会計年度(平成29年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照 表計上額を超えるも の	(1)国債・地方債等	—	—	—
	(2)その他	2,500	2,589	89
	小計	2,500	2,589	89
時価が連結貸借対照 表計上額を超えない もの	(1)国債・地方債等	—	—	—
	(2)その他	400	358	△41
	小計	400	358	△41
合計		2,900	2,948	48

当連結会計年度(平成30年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照 表計上額を超えるも の	(1)国債・地方債等	—	—	—
	(2)その他	2,000	2,059	59
	小計	2,000	2,059	59
時価が連結貸借対照 表計上額を超えない もの	(1)国債・地方債等	—	—	—
	(2)その他	1,400	1,359	△40
	小計	1,400	1,359	△40
合計		3,400	3,419	19

2 その他有価証券

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え るもの	(1)株式	30,801	5,100	25,701
	(2)債券			
	①国債・地方債等	—	—	—
	②社債	—	—	—
	③その他	—	—	—
	(3)その他	1,381	859	522
	小計	32,183	5,959	26,223
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え ないもの	(1)株式	0	0	△0
	(2)債券			
	①国債・地方債等	—	—	—
	②社債	—	—	—
	③その他	—	—	—
	(3)その他	25,000	25,000	—
	小計	25,000	25,000	△0
合計		57,183	30,960	26,223

(注)非上場株式等（連結貸借対照表計上額3,499百万円）及び組合出資金の一部（連結貸借対照表計上額17百万円）については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え るもの	(1)株式	34,536	5,187	29,348
	(2)債券			
	①国債・地方債等	—	—	—
	②社債	—	—	—
	③その他	—	—	—
	(3)その他	2,974	973	2,000
	小計	37,511	6,161	31,349
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え ないもの	(1)株式	0	0	△0
	(2)債券			
	①国債・地方債等	—	—	—
	②社債	—	—	—
	③その他	—	—	—
	(3)その他	—	—	—
	小計	0	0	△0
合計		37,511	6,161	31,349

(注)非上場株式等（連結貸借対照表計上額3,871百万円）及び組合出資金の一部（連結貸借対照表計上額6百万円）については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

3 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	49	42	—

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	207	100	—

4 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度において、有価証券について217百万円(その他有価証券で時価評価されていない非上場株式217百万円)減損処理を行っております。

当連結会計年度において、有価証券について51百万円(その他有価証券で時価評価されていない非上場株式51百万円)減損処理を行っております。

なお、減損処理にあたって、時価のある株式については、期末における時価が取得原価に比べ50%超下落した場合は全て減損処理を行い、30～50%程度下落した場合に、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております。

時価評価されていない非上場株式については、当該発行体の純資産に占める持分相当額が帳簿価額よりも50%超下落した場合には全て減損処理を行い、30～50%程度下落した場合に、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、確定給付型の制度として確定給付企業年金制度（DB）及び退職一時金制度を、確定拠出型の制度として確定拠出年金制度（DC）を導入しております。また、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。

なお、一部の連結子会社が有する退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

平成17年4月の法令改正により、未認識年金資産を未認識過去勤務債務として認識し、平成17年より費用償却を開始しました。

2. 確定給付制度（簡便法を適用した制度を除く）

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
退職給付債務の期首残高		11,811		11,471
勤務費用		702		674
利息費用		16		33
数理計算上の差異の発生額		△174		△65
退職給付の支払額		△893		△1,319
その他		8		—
退職給付債務の期末残高		11,471		10,795

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
年金資産の期首残高		10,928		11,440
期待運用収益		218		228
数理計算上の差異の発生額		673		214
事業主からの拠出額		513		491
退職給付の支払額		△893		△1,319
年金資産の期末残高		11,440		11,056

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(平成29年3月31日)		(平成30年3月31日)	
積立型制度の退職給付債務		11,471		10,795
年金資産		△11,440		△11,056
		31		△260
非積立型制度の退職給付債務		—		—
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額		31		△260
退職給付に係る負債		31		—
退職給付に係る資産		—		△260
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額		31		△260

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
勤務費用		702		674
利息費用		16		33
期待運用収益		△218		△228
数理計算上の差異の費用処理額		308		269
過去勤務費用の費用処理額		21		21
確定給付制度に係る退職給付費用		830		770

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
過去勤務費用		△21		△21
数理計算上の差異		△1,155		△549
合計		△1,176		△570

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(平成29年3月31日)		(平成30年3月31日)	
未認識過去勤務費用		67		45
未認識数理計算上の差異		79		△469
合計		147		△423

(7) 年金資産に関する事項

①年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(平成29年3月31日)		(平成30年3月31日)	
債券		28%		28%
株式		25%		26%
現金及び預金		5%		4%
生保一般勘定		24%		23%
その他		18%		19%
合計		100%		100%

②長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表わしております。）

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
割引率		0.2%		0.2%
長期期待運用収益率		2.0%		2.0%
予想昇給率		0.0%		0.0%

3. 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	57	43
退職給付費用	8	6
退職給付の支払額	△21	△13
制度への拠出額	—	—
退職給付に係る負債の期末残高	43	37

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(平成29年3月31日)	(平成30年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	—	—
年金資産	—	—
非積立型制度の退職給付債務	43	37
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	43	37
退職給付に係る負債	43	37
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	43	37

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度8百万円 当連結会計年度6百万円

4. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度135百万円、当連結会計年度132百万円であります。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日現在)	当連結会計年度 (平成30年3月31日現在)
繰延税金資産（流動）		
貸倒引当金損金算入限度超過額	270	233
賞与引当金損金算入限度超過額	297	352
未払事業税否認	64	104
暫定値引	59	76
その他	152	164
繰延税金資産（流動）小計	843	931
評価性引当額	△319	△262
繰延税金資産（流動）合計	523	669
繰延税金負債（流動）		
その他	0	—
繰延税金負債（流動）合計	0	—
差引繰延税金資産（流動）の純額	523	669
繰延税金資産（固定）		
貸倒引当金損金算入限度超過額	368	378
退職給付に係る負債損金算入限度超過額	23	△71
長期末払金	60	60
減損会計評価損	816	763
繰越欠損金（長期）	950	936
その他	359	389
繰延税金資産（固定）小計	2,578	2,456
評価性引当額	△2,361	△2,340
繰延税金資産（固定）合計	217	115
繰延税金負債（固定）		
固定資産圧縮積立金	465	460
その他有価証券評価差額金	8,026	9,596
繰延税金負債（固定）合計	8,492	10,056
差引繰延税金資産（固定）の純額 (△は繰延税金負債（固定）の純額)	△8,275	△9,940

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

(単位：%)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率	30.7	30.7
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	4.9	1.1
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△4.5	△3.9
住民税均等割等	1.1	1.1
欠損子会社の影響額	△0.2	△0.2
連結修正に伴う影響額	3.0	3.1
連結子会社との実効税率差異	0.9	0.8
法人税額の特別控除	△1.6	—
評価性引当額の増減	3.0	△0.3
その他	△1.8	△0.5
税効果会計適用後の法人税等の負担率	35.4	31.9

(資産除去債務関係)

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）及び当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

当社グループは、資産除去債務の計上に関して、重要性の原則及び社内基準を勘案し判断する旨を規定しております。算定結果をもとに重要性が乏しいと判断されたため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）及び当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社グループは医療用医薬品、一般用医薬品、動物用医薬品、医療機器等の卸販売事業ならびにその他事業を行っておりますが、卸販売事業を中心としたほぼ単一のセグメントであるため、セグメント情報の記載を省略しております。

【関連情報】

1 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の営業収益の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

当社グループはセグメント情報を記載しておらず、重要性も乏しいため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

当社グループはセグメント情報を記載しておらず、重要性も乏しいため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

当社グループはセグメント情報を記載しておらず、重要性も乏しいため、記載を省略しております。

【関連当事者情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額	3,084.49円	3,297.76円
1株当たり当期純利益金額	94.06円	114.97円

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益金額(百万円)	3,241	3,961
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益金額(百万円)	3,241	3,961
期中平均株式数(千株)	34,457	34,451

3. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	109,845	117,433
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	3,575	3,825
(うち非支配株主持分(百万円))	(3,575)	(3,825)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	106,270	113,607
1株当たり純資産額の算定に用いられた普通株式の数(千株)	34,453	34,449

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
1年以内に返済予定のリース債務	235	106	—	—
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く)	30	30	5.6	平成37年 一括返済
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く)	160	116	—	平成31年～36年
合計	425	253	—	—

(注) 1. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

2. リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりです。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
リース債務	50	35	20	7

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

該当事項はありません。

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,690	1,853
預け金	※1 3,381	※1 5,014
未収入金	※1 113	※1 110
仮払金	—	0
有価証券	500	—
短期貸付金	※1 90	70
1年内回収予定の長期貸付金	※1 73	※1 134
貯蔵品	2	2
未収収益	※1 21	※1 12
前払費用	5	4
繰延税金資産	9	13
貸倒引当金	△0	△0
流動資産合計	5,887	7,214
固定資産		
有形固定資産		
建物附属設備	8	6
工具器具及び備品	46	47
土地	1,447	1,447
建設仮勘定	19	—
有形固定資産合計	1,522	1,501
無形固定資産		
電話加入権	3	3
ソフトウェア	103	103
無形固定資産合計	106	106
投資その他の資産		
投資有価証券	2,979	3,931
関係会社株式	53,994	53,995
長期貸付金	※1 2,852	※1 1,457
長期前払費用	0	3
敷金	61	63
保険積立金	499	499
前払年金費用	20	12
繰延税金資産	—	4
貸倒引当金	△244	△271
投資損失引当金	—	△51
投資その他の資産合計	60,164	59,647
固定資産合計	61,792	61,255
資産合計	67,680	68,469

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
負債の部		
流動負債		
未払金	※1 29	※1 17
未払法人税等	25	31
未払消費税等	0	18
未払費用	※1 53	※1 73
預り金	※1 10,361	※1 11,064
賞与引当金	10	18
役員賞与引当金	6	8
流動負債合計	10,487	11,232
固定負債		
長期預り保証金	100	100
長期末払金	104	105
繰延税金負債	8	—
固定負債合計	213	205
負債合計	10,700	11,437
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,000	3,000
資本剰余金		
資本準備金	2,151	2,151
その他資本剰余金	52,759	52,759
資本剰余金合計	54,910	54,910
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	1,495	1,577
利益剰余金合計	1,495	1,577
自己株式	△2,505	△2,508
株主資本合計	56,900	56,978
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	79	53
評価・換算差額等合計	79	53
純資産合計	56,979	57,032
負債純資産合計	67,680	68,469

② 【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高	※1 1,360	※1 1,460
売上総利益	1,360	1,460
販売費及び一般管理費	※1,2 923	※1,2 1,030
営業利益	436	430
営業外収益		
受取利息	※1 44	※1 15
有価証券利息	56	86
受取配当金	※1 47	※1 52
受取地代家賃	※1 143	※1 148
その他	※1 28	※1 13
営業外収益合計	320	316
営業外費用		
支払利息	※1 65	※1 64
貸倒引当金繰入額	60	27
その他	※1 5	※1 4
営業外費用合計	131	96
経常利益	625	649
特別利益		
特別損失		
固定資産除却損	0	0
投資有価証券評価損	8	—
投資損失引当金繰入額	—	※1 51
特別損失合計	8	51
税引前当期純利益	616	598
法人税、住民税及び事業税	35	41
法人税等調整額	△2	△6
法人税等合計	32	35
当期純利益	584	563

③ 【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金			利益剰余金
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金
当期首残高	3,000	2,151	52,759	54,910	1,463
当期変動額					
剰余金の配当					△551
当期純利益					584
自己株式の取得					
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	—	—	32
当期末残高	3,000	2,151	52,759	54,910	1,495

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△2,498	56,875	51	51	56,926
当期変動額					
剰余金の配当		△551			△551
当期純利益		584			584
自己株式の取得	△7	△7			△7
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）			27	27	27
当期変動額合計	△7	25	27	27	53
当期末残高	△2,505	56,900	79	79	56,979

当事業年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金			利益剰余金
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金
当期首残高	3,000	2,151	52,759	54,910	1,495
当期変動額					
剰余金の配当					△482
当期純利益					563
自己株式の取得					
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	－	－	－	81
当期末残高	3,000	2,151	52,759	54,910	1,577

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△2,505	56,900	79	79	56,979
当期変動額					
剰余金の配当		△482			△482
当期純利益		563			563
自己株式の取得	△3	△3			△3
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）			△25	△25	△25
当期変動額合計	△3	78	△25	△25	52
当期末残高	△2,508	56,978	53	53	57,032

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

① 満期保有目的の債券

償却原価法（定額法）を採用しております。

② 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法を採用しております。

③ その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定率法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物附属設備 3～15年

工具器具及び備品 4～20年

(2) 無形固定資産

定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づいております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については市場における貸倒リスクと同程度、もしくは貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 投資損失引当金

子会社への投資に係る損失に備えるため、当該会社の財政状態を勘案して必要額を引当計上しております。

(3) 賞与引当金

従業員（管理職を除く）の賞与支給に充てるため、翌期賞与支給見込額のうち当期負担額（夏季賞与支給見込額）を計上しております。

(4) 役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えて、当事業年度における支給見込額の当事業年度負担額を計上しております。

(5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。事業年度末において、年金資産見込額が退職給付債務見込額を超過している場合は、超過額を前払年金費用として計上しております。

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当期までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

過去勤務費用については、発生年度の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理する方法によっております。

数理計算上の差異は、各事業年度年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理することとしております。

4. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異、未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっており、資産に係る控除対象外消費税及び地方消費税は当事業年度の費用として処理しております。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社項目

関係会社に対する金銭債権、債務

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
短期金銭債権	3,559百万円	5,150百万円
長期金銭債権	2,805百万円	1,415百万円
短期金銭債務	10,368百万円	11,082百万円

2 偶発債務

次の関係会社について、金融機関からの借入に対し債務保証を行っております。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
うすき製薬(株)	3百万円	0百万円
(株)創健	1百万円	3百万円
計	3百万円	3百万円

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業取引(収入分)	814百万円	910百万円
営業取引以外の取引(収入分)	79百万円	673百万円
営業取引以外の取引(支出分)	△93百万円	△53百万円

※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
報酬及び給料手当	350百万円	412百万円
福利厚生費	75百万円	99百万円
賞与引当金繰入額	△2百万円	8百万円
役員賞与引当金繰入額	△6百万円	1百万円
不動産賃借料	109百万円	107百万円
退職給付費用	24百万円	22百万円
減価償却費	80百万円	64百万円

おおよその割合

販売費	0%	0%
一般管理費	100%	100%

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式53,535百万円、関連会社株式458百万円、当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式53,537百万円、関連会社株式458百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
繰延税金資産（流動）		
貸倒引当金	0	0
賞与引当金	3	5
未払事業税	5	7
その他	1	0
評価性引当額	△0	△0
繰延税金資産（流動）の合計	9	13
繰延税金資産（固定）		
貸倒引当金	74	82
前払年金費用	△6	△3
長期未払金	31	32
投資有価証券評価損	12	15
投資損失引当金	—	15
減損会計評価損	344	344
その他	0	0
評価性引当額	△431	△458
繰延税金資産（固定）の合計	25	28
繰延税金負債		
繰延税金負債（固定）		
その他有価証券評価差額金	34	23
繰延税金負債（固定）の合計	34	23

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

(単位：%)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率	30.7	30.7
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.2	0.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△29.1	△30.4
住民税均等割	0.4	0.4
役員賞与引当金	△0.3	0.1
役員賞与	0.6	0.3
評価性引当額の増減額	2.6	4.5
繰越欠損金	△0.4	—
その他	0.4	0.0
税効果会計適用後の法人税等の負担率	5.2	5.9

④ 【附属明細表】

【有価証券明細表】

【株式】

銘柄		株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	
投資有価証券	その他有価証券	トヨタ自動車(株)種類株式	25,000	264
		キョーリン製薬ホールディングス(株)	100,000	199
		第一生命ホールディングス(株)	30,300	58
		(株)ケアルプラス	28	1
		計	155,328	525

【債券】

銘柄		券面総額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)	
投資有価証券	満期保有目的の 債券	シルフリミテッド シリーズ1178	1,000	1,000
		シルフリミテッド シリーズ754	1,000	1,000
		クレジットリンク債 53662	500	500
		クレジットリンク債 Q6435	500	500
		シルフリミテッド シリーズ50079	300	300
		ユーロ円建ステップアップ債	100	100
		計	3,400	3,400

【その他】

種類及び銘柄		投資口数等 (口)	貸借対照表計上額 (百万円)	
投資有価証券	その他有価証券	大分VCサクセスファンド	3	6
		計	3	6

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却 累計額
有形固定資産	建物附属設備	8	—	—	1	6	23
	工具器具及び備品	46	18	0	18	47	288
	土地	1,447	—	—	—	1,447	—
	建設仮勘定	19	17	37	—	—	—
	計	1,522	35	37	19	1,501	311
無形固定資産	電話加入権	3	—	—	—	3	
	ソフトウェア	103	45	—	44	103	
	計	106	45	—	44	106	

(注) 当期増加額の主なものは次のとおりであります。

工具器具及び備品	サイバーセキュリティー機器	11百万円
ソフトウェア	経理ワークフローシステム更新	33百万円

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	244	34	6	272
投資損失引当金	—	51	—	51
賞与引当金	10	18	10	18
役員賞与引当金	6	8	6	8

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	毎年4月1日から3ヶ月以内
基準日	毎年3月31日
株券の種類	100,000株券、10,000株券、5,000株券、1,000株券、1,000株未満券
剰余金の配当の基準日	毎年3月31日
1単元の株式数	1,000株
株式の名義書換え	
取扱場所	東京都杉並区和泉二丁目8番4号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	三井住友信託銀行株式会社 全国各支店
名義書換手数料	無料
新券交付手数料	無料
単元未満株式の買取り	
取扱場所	東京都杉並区和泉二丁目8番4号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	三井住友信託銀行株式会社 全国各支店
買取手数料	無料
公告掲載方法	官報に掲載を行う。
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 1. 当社の株式の譲渡又は取得については、株主又は取得者は取締役会の承認を受けなければなりません。

2. 当社の定款第9条に基づき、単元未満株主は、その有する単元未満株式について次の権利以外の権利を行使することができないことを規定しております。

- ①会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- ②会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- ③株主の有する株式等に応じて募集株式及び募集新株予約券の割当を受ける権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

該当事項はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類

事業年度（第9期）（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日） 平成29年6月26日九州財務局長に提出。

(2) 半期報告書

（第10期中）（自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日） 平成29年12月21日九州財務局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書

平成30年6月15日

株式会社フォレストホールディングス
取締役会 御中

貞 閑・大石 公認会計士 共同事務所

公認会計士 貞 閑 孝 也 ⑩

公認会計士 大 石 聡 ⑩

公認会計士 川 野 嘉 久 ⑩

私たちは、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社フォレストホールディングスの平成29年4月1日から平成30年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

私たちの責任は、私たちが実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。私たちは、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私たちに連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、私たちの判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、私たちは、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

私たちは、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

私たちは、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社フォレストホールディングス及び連結子会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と私たちとの間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が連結財務諸表に添付する形で別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成30年6月15日

株式会社フォレストホールディングス
取締役会 御中

貞 閑・大 石 公 認 会 計 士 共 同 事 務 所

公認会計士 貞 閑 孝 也 ⑩

公認会計士 大 石 聡 ⑩

公認会計士 川 野 嘉 久 ⑩

私たちは、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社フォレストホールディングスの平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第10期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

私たちの責任は、私たちが実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。私たちは、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私たちに財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、私たちの判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、私たちは、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

私たちは、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

私たちは、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社フォレストホールディングスの平成30年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と私たちとの間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が財務諸表に添付する形で別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

